

平成三十年度 長期研修生 研究報告書

平成30年度 長期研修生

研究報告書

平成31年3月 山形県教育センター



山形県教育センター



は し が き

教育をめぐる情勢が大きく変化し、学校教育が抱える課題も複雑・多様化する現在、教員の資質能力の一層の向上が求められています。

県教育センターでは、第6次山形県教育振興計画に基づき、時代の要請を受けた調査研究や、小・中・高等学校、特別支援学校の新学習指導要領の施行に向けた授業実践課題について、学校や教育機関と連携しながら調査研究を進めております。

長期研修は、県教育センターの重要な研修事業の一つであり、教員としての資質や実践的な指導力向上を図り、「信頼され、尊敬される教員」を育成することを目的にしております。また、県教育センターの研究の共同研究者として研究を進める「研修A」と、研修生が主体的に設定したテーマにより研究を進める「研修B」の2種類を実施しております。

今年度は、県教育センターが掲げた3本の研究テーマのうち「小学校英語教育に係る学校ニーズへの対応」において、「研修A」として中学校の教員がセンター職員とともに研究に取り組みました。長期研修生は、研究のテーマを自分のものとしてとらえ、自分のサブテーマを持ちながら研究を推進するために大きな力を発揮しました。「研修B」においては、小学校の教員が「特別支援教育」について長期研修を行いました。

今後、研修生が各自の研究の成果とこれからの課題をしっかりと確認し、所属の学校にとどまらず、さらに広い範囲で研修の成果を還元してくださることを期待します。

本研究報告書は、研修生の真摯な取り組みによる成果の一端をまとめたものです。研修生自身の今後の教育活動の標となることはもちろん、本県教育の充実発展に寄与することを祈念しております。御高覧いただき、御感想をお寄せいただければ幸いです。

最後になりましたが、これまでの研修に対し、温かい御配慮と懇切丁寧な御指導をいただきました関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成31年3月

山形県教育センター
所長 柏 倉 昭 夫

目 次

（研修A）

1 小学校英語教育における魅力ある授業づくり

～滑らかな小中高連携を目指して～

（後期6か月研修） 南陽市立宮内中学校 教諭 山田 奈美

（研修B）

1 知的障がい特別支援学級における個別の指導計画を活用した授業づくり

（前期6か月研修） 川西町立小松小学校 教諭 竹田 孝子

研修A：県教育センターが掲げる研究テーマを基に、研修生がセンター所員と共同で研究
研修B：研修生が主体的に設定したテーマに基づく研究

（研修A）

1 小学校英語教育における魅力ある授業づくり

～滑らかな小中高連携を目指して～

（後期6か月研修） 南陽市立宮内中学校 教諭 山田 奈美

小学校英語教育における魅力ある授業づくり

～滑らかな小中高連携を目指して～

南陽市立宮内中学校 教諭 山田 奈美

平成20年に告示された小学校学習指導要領で、高学年に年間各35時間、外国語活動が導入された。私は、中学入学時にすでに英語に苦手意識を持っている生徒に出会ったり、卒業生から高等学校での授業では表現力を伸ばすことができないのではないかと不安を訴えられたりして、小中、中高の連携の必要性を感じていた。2020年度からの学習指導要領全面実施が近づき、小中高の連携を、小学校の先生方が「やってみようかな。」と思える魅力ある授業づくりから目指したいと考え、本主題を設定した。

基礎研究から、育成を目指す資質・能力の理解、資質・能力の育成につながる言語活動、言語活動の精度を高める意欲喚起、という三つの視点を大切に、単元・授業づくりをしていくことで、主題に迫ることができるのではないかと考えた。そして、山形県教育センターの調査研究の協力者として、単元・授業を開発し、実践・検証を重ね、改善プランを考えた。

研究を進める中で、「魅力ある授業」とは『目指す資質・能力を育成するために、こんな活動・授業をやってみよう』と思える授業』だと考えるようになった。本研究では、「魅力ある授業づくり」に向けて三つの視点を重視した、小学校の二つの単元における改善プランを提案する。

キーワード：小中連携、中高連携、小中高連携、資質・能力、言語活動、意欲喚起

I はじめに

平成20年に告示された小学校学習指導要領で、高学年に年間各35時間、外国語活動が導入された。平成29年3月には、幼稚園・小学校・中学校の新学習指導要領が告示され、小学校では「外国語活動」を第3・4学年で、「外国語（英語）科」を第5・6学年で扱うことになった。学習指導要領の改訂にあたっては、どの教科・領域においても育成を目指す資質・能力が、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱から整理された。外国語活動から外国語科へ、小学校から中学校へ、中学校から高等学校へ、外国語によるコミュニケーション能力の育成を一貫して図ることが意識されている。

中学校教員として勤務して17年目となるが、英語という新しい窓から自分や仲間、世界を見ることが、自分や仲間の良さを見つかったり、誰かのために自分ができることを考えたりする生徒を育てたいと考え、「自分と周りの人の幸せに貢献できるグローバルな『人財』の育成」を目指し教育してきた。英語改革が進む中で、小学校での外国語活動を参観したり、外国語活動に関する会議に出席したりし、小学校での英語教育について困惑している小学校の先生方、すでに英語やコミュニケーションについて苦手意識を持っている子どもたちに出会ってきた。また、高校に進学した教え子たちからは、これまで培ってきた表現力を生かすことができないのではないかと不安を訴えられることがあった。中学校英語教員として、中学校3年間の教育だけを考えていたのでは、一貫した外国語学習の実現は難しいと感じてきた。

山形県教育センターが、小学校の英語教育に係るニーズへの対応について研究を積み重ねていくことを知り、中学校教員としてその研究を共にさせていただくことが、小学校外国語教育理解を深め、小中一貫した外国語教育の在り方を考える機会になるのではないかと考えた。また、小中高の滑らかな連携を目指し、これから本格的に始まる小学校英語教育において魅力ある授業づくりを研究することで、その実現に向けた一助になるのではないかと考え、本研究主題を設定した。英語に苦手意識を持たれていたり、多忙な中、これから小学校英語教育に向かおうとしたりして

いる先生方が、「これならできそう、おもしろそうだからやってみようかな。」と意欲を持てるような、魅力ある授業づくりのポイントを見つけることを目指した。

II 研究の進め方

1 研究のねらい

滑らかな小中高連携を目指し、小学校英語教育において魅力ある授業をつくるために大切な視点を明らかにする。

2 研究の方法

(1) 魅力ある授業をつくるための視点に関する基礎研究

① 書籍、論文、web による文献研究

学習指導要領や英語教育等に関する文献を読み、考察した。

② 先進校等や研究会での調査研究

- ・江戸川区立一之江小学校（CALAインターナショナル代表阿部フォード恵子氏講演会を含む）、南陽市立宮内小学校、村山市立西郷小学校での授業参観及び事後研究会への参加
- ・第70回高円宮杯中学校英語弁論大会への視察及び教育者会議への参加

(2) 調査研究協力校における小学校外国語活動・外国語の授業開発・実践・検証

南陽市立沖郷小学校において、学習活動例の実践・検証を行い、検証した内容を県教育センターで作成中の「小学校外国語教育ハンドブック」に載せる。

- ・第3学年の実践
- ・第6学年の実践

III 研究の内容

1 魅力ある授業をつくるための三つの視点

滑らかな小中高連携を目指し、小学校英語教育において魅力ある授業をつくるために大切な視点を見つけることを目的に、文献研究と調査研究を行った。「各学校段階で求められる資質・能力について理解すること」、「その資質・能力を育成するために適切な言語活動を行うこと」、「言語活動の精度を高めるために児童生徒の意欲喚起をし続けること」、という三つの視点を大切に単元や授業を作ること、主題に迫っていきけるのではないかと考えた。

(1) 育成を目指す資質・能力

「外国語活動・外国語の目標」は、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」を一体的に育成するとともに、その過程を通して、「学びに向かう力、人間性等」に示す資質・能力を育成し、小学校及び中学校、高等学校で一貫した目標を実現するため、そこに至る段階を示すものとして CEFR（外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠）を参考に、①各学校段階の学びを接続させるとともに、②「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にするという観点から、5つの領域で設定されている。

小学校中学年では、目標を「聞くこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」の領域において設定し、音声面を中心とした外国語を用いたコミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成していく。高学年においては、「読むこと」、「書くこと」を加えた教科として外国語を導入し、五つの領域の言語活動を通してコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することとしている。中学校及び高等学校では、こうした小学校での学びを踏まえ、五つの領域の言語活動を通してコミュニケーションを図る資質・能力を育成することとしている。

下図は、「外国語活動・外国語科」の学校段階別一覧表（図1）である。

図1 「外国語活動・外国語科の目標」学校段階別一覧表

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方				
外国語で素直に伝え合うため、外国語とその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること				
外国語科の目標				
	小学校第3学年及び第4学年 外国語活動	小学校第5学年及び第6学年 外国語	中学校 外国語	高等学校 外国語
	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を軸かせ、外国語による聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと、書くことなどの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を軸かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことなどの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を軸かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことなどの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を軸かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことなどの言語活動及びこれらに結び付けた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に表現したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
(知識及び技能)	(1) 外国語を通して、言語や文化について体系的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な振動に慣れ親しむようにする。	(1) 外国語の音声や文法、語彙、文法、語彙の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。	(1) 外国語の音声や語彙、文法、文法、語彙の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。	(1) 外国語の音声や語彙、文法、文法、語彙の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。
(思考力、判断力、表現力等)	(2) 身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。	(2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を指し示しながら読んだり、読解を深めながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。	(2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。	(2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で情報や考えなどを的確に表現したり、これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。
(学びに向かう力、人間性等)	(3) 外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手と配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	(3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	(3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	(3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

また、以下は、学習指導要領に示されている、「聞くこと ア」の目標である。

小学校 中学年	ゆつくりはっきりと話された際に、 <u>自分のことや身の回りの物を表す簡単な語句</u> を聞き取れるようにする。
小学校 高学年	ゆつくりはっきりと話されれば、 <u>自分のことや身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現</u> を聞き取ることができるようにする。
中学校	はっきりと話されれば、 <u>日常的な話題</u> について、 <u>必要な情報</u> を聞き取ることができるようにする。
高等学校	<u>日常的な話題</u> について、話される速さや、使用される語句や文、情報量などにおいて、 <u>多くの支援を活用すれば、必要な情報</u> を聞き取り、 <u>話し手の意図</u> を把握することができるようにする。

（下線部等は酒井による）

酒井（2017）によると、話題が二重下線部（ ）のように段階的に広がり、聞く英語の条件が下線部（ ）のように変わり、言語行為が波線部（ ）のように複雑になっていく、とある。他の4領域についても、小中高一貫した学習到達目標を志向しており、「外国語を使って何ができるようになるか」という観点から、小中高の連携を考えることが重要である。

(2) 言語活動

(1)の図1で示した、「外国語活動」や「外国語」の目標の中で、コミュニケーションを図る素地・基礎となる資質・能力を育成するのは「言語活動を通して」とされており、言語活動は外国語活動や外国語科において核である。

小学校外国語活動・外国語研修ガイドブックでは、言語活動を「実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う活動」と定義づけている。

学習指導要領では、「言語活動及び言語の働きに関する事項」において、次のように記されている。

言語活動を設定するに当たっては、児童が興味・関心をもつ題材を扱い、聞いたり話したりする必然性のある体験的な活動を設定することが大切である。（中学年）

言語活動を行う際は、単に繰り返し活動を行うのではなく、児童（生徒）が言語活動の目的や言語の使用場面を意識して行うことができるよう、具体的な課題等を設定し、その目的を達成するために、必要な言語材料を取捨選択して活用できるようにすることが必要である。このような言語活動を通じて、児童（生徒）の「学びに向かう力、人間性等」を育成することが重要である。（高学年、中学校）

東京都江戸川区立一之江小学校での講演会において、阿部フォード氏は、「発話に必然性のある場面設定をすることが児童のコミュニケーション力育成を目指すために必要だ」と述べており、氏の指導している小・中学校では、指導案に「必然性」のある場面を明確に示している。

以上のことから、目指す資質・能力を育成するためには、目的や場面、状況等が明確な言語活動を工夫していく必要がある。それらが明確であれば必然性が生まれると考える。

また、学習指導要領に示されている言語活動は、それまでの児童生徒の学びを踏まえて設定されている。

「聞くこと」の言語活動を例にとると、高学年の言語活動「聞くこと」(ウ)の活動において、「簡単な語句や基本的な表現で話される短い会話や説明から必要な情報を得る活動」を行うためには、中学年において「聞くこと」(ア)で「おおよその内容」が分かったり、(イ)「簡単な語句や基本的な表現」の意味をつかんだりする言語活動が基礎となる。中学校においては、「聞くこと」の目標である3つに関連する言語活動として、(ア)「日常的な話題について、自然な口調で話される英語を聞いて、話し手の意向を正確に把握する活動」が設定されている。この活動では、自然な口調で話されても相手の言っていることが理解できる必要があるため、小学校において「聞くこと」の力を意識した言語活動で養っておかなくてはならない。前学年や学校段階での学びを把握し、目的や場面を意識して、必要な言語材料を取捨選択して活用できるようにすることが重要である。

中学校及び高等学校指導要領では、言語活動に関する事項のはじめに、前学校段階における学習内容の定着を図るために必要なものを、生徒の実態を踏まえ初年時の導入段階から必要な言語活動を通じた学習を繰り返す行い、前学校段階からの学びを当学校段階の学びへ接続させる指導を行うことを求めている。

(3) 意欲の喚起

原田(2018)は、どんな心で、どんな気持ちで取り組むかということが、パフォーマンスに多大な影響を与え、と言い、「パフォーマンス=何を×どんな心で」という公式を唱え、メンタルトレーニングを指導している。その公式は、活用している野球の大会選手やフィギュアスケートの紀平梨花選手をはじめとする多くのスポーツ選手や世界中の多くの企業等の成果で証明されている。また、奈須(2017)は、マクレランドの研究から、質の高い問題解決を現に成し遂げるには、意欲や感情の自己調整能力といった非認知的能力が決定的に重要であると主張している。

小学校外国語活動・外国語研修ハンドブックでは、以下のように示されている。

(前略)外国語を教室で学ぶ場合は、目標言語を学習する動機付けが必要である。(中略)外国語活動や外国語科における児童の動機付けの源は、授業で指導者と経験する活動である。外国語活動・外国語科でも、児童の活動に対する動機づけを積極的に高めていく必要がある。体験すること・できることの楽しさ、難しいことに挑戦することの楽しさ等、あらかじめ児童の実態を適切に調査し、その児童に合った動機付けの要因を明らかにし、それを高めていくような活動に取り組んでいく必要がある。第二言語習得理論に基づくと、以下の3段階を意識しながら児童を動機付けていくとよいだろう。

行動前段階	楽しく、互いに学び合おうとする雰囲気を作りだそうとする 教師が英語力を磨き、児童にとってよいモデルになろうとする など
行動段階	児童の興味・関心に合わせて活動をデザインしようとする 児童の自尊感情を大切に、自信を高めようとする など
行動後段階	児童の努力をほめる 児童が自己評価する機会をつくる など

(「小学校外国語活動・外国語研修ハンドブック」から作成)

また、「平成30年度 学校教育指導の重点」(2018)には、「探究型学習」を進める上で重視することとして、単元や授業の構想において「一人ひとりの学びを見つめ、学ぶ側の思考を思い描くこと」、授業の実践において、「児童生徒が、各教科・科目等の学ぶ楽しさやよさを実感できること」や「児童生徒が、自己変容の自覚と次の学びへの意欲をもてること」を挙げている。

課題設定の場面において児童生徒が問いを抱き、仲間とその問いを共有し、気づき、活動を通して検証し、仲間とともに学びをまとめ、次の意欲を持てるような授業デザインが必要であると考えた。

研修前の自身の実践を振り返ると、本時のねらいや行動目標を生徒と共有するために、課題を教師自身から提示することが多く、生徒から湧き上がる課題についての意識が低かったように思う。そこで、この研修における実践では、課題への動機づけを工夫し、児童の問いに沿った課題の設定を研究しようと考えた。

さらに、先ほどの表に表された「行動段階」では、「児童の自尊感情を大切に、自信を高めようとする」とある。江戸川区立一之江小学校での研究会において、「グループトーク」を活用することで、自尊感情が高まり、生き生きとした児童の姿が見られるようになった、という取組みが紹介された。

研修前に参観させていただいた小学校の授業では、グループトークが活用された授業は少なかった。外国語の学習経験がまだ多くはない小学生においては、特に安心して発言できる手立てとなるのではないかと考えた。

そして、阿部フォード(2019)は、「英語学習では、五感(視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚)のうち、視覚、聴覚、触覚を利用して、指導を展開していくことになります。」「指導者も児童も、この3つの感覚のうち、いずれか1つがほかより発達しているものです。そのため指導者は、無意識に自分の優れた感覚を中心とした授業を進めがちです。そうすると、それ以外の感覚のほうが発達している児童は、授業がつまらなく思えたり、不満がたまったりします。そこで、指導内容に3つの感覚をバランス良く取り入れるようにすると、クラスに活気が出て、すべての児童が達成感を持つことができます。」と述べている。

中学生以上に小学生は、触覚にあてはまるジェスチャーの活用が有効かと考え、聴覚や視覚だけでなく、触覚も含めた学習活動を取り入れようと考えた。

以上のことから、課題設定の工夫やグループトークの活用、3つの感覚をバランスよく取り入れた学習活動により、意欲を喚起し続けることで、言語活動の精度を高め、資質・能力の育成につながると考える。

2 三つの視点を生かした小学校外国語活動・外国語の授業

山形県教育センターでは、小学校英語教育に係る学校ニーズへの対応のために、学習指導要領で示された資質・能力を児童の姿で捉え、その姿を実現するにはどのような言語活動が効果的かについて、単元や授業を開発・実践・検証している。私は、3年生及び6年生において、「聞くこと（思考力、判断力、表現力等）」、5年生では、「読むこと（思考力、判断力、表現力等）」について開発を担当した。ここでは、3学年、及び6学年において、大切にしたい3つの視点を基に、開発と実践の様子、検証を経た改善プランについて述べる。

- (1) 第3学年 単元名 きみはだれ? <教材 Let's Try! Unit9 Who are you?>
※4時間扱いの単元の2時間目に実践を行う

① 単元の目標

- ア 色や形、状態など、動物（dragon を含む）を表す単語を繰り返し聞いたり、発音したりすることで、日本語と英語の音声やリズムなどの違いに気づく。【知識及び技能】
イ 絵本などの短い話を聞いて、色や形、状態などを表す語を手がかりとして、何の動物か判断し、伝えたい動物について、色や形、状態などを表す語や、“Are you? Yes, I am.”などの言い方を用い、表現する。【思考力、判断力、表現力等】
ウ 短い話などに反応しながら聞くとともに、相手に伝わるように、ジェスチャーを用いたりしながら、伝えたいことを言おうとする。【学びに向かう力、人間性等】

② 該当する学習指導要領における主たる領域別目標

聞くこと	ア ゆっくりははっきりと話された際に、自分のことや身の回りの物を表す簡単な語句を聞き取れるようにする。
------	---

③ 育成を目指す資質・能力

—該当する学習指導要領における内容—

【思考力、判断力、表現力等】

情報を整理しながら考えなどを形成し、英語で表現したり、伝え合ったりすることに関する事項

- ア 自分のことや身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を使って、相手に配慮しながら、伝え合うこと。

本時に育成を目指す資質・能力（「聞くこと」（思考力、判断力、表現力等））を次のように考えた。

- ・絵本の内容に関するクイズを聞いて、色や形、状態などを表す語を手がかりとして、仲間が好きな動物が何か表す

色や形、状態などを表す語を聞きとり、語と絵を結び付けて思考、判断し、それらを手がかりとして絵で示された動物を見つけることを目指した。また、聞くことを対象としたため、動物を答えるときには、動物名を英語で答える他にも、動物をジェスチャーで表したり、動物の絵を指さしたりしている姿も含めて目指す資質・能力と考えた。

中学年で、英語の音やリズムに十分慣れ親しみ、自分や身の回りの範囲での語句を聞き取る力を身に付けさせることが、高学年での「基本的な表現」「具体的な情報」を聞き取る資質・能力の育成につながると考えた。

④ 言語活動

—該当する学習指導要領における内容—

言語活動に関する事項

ア 聞くこと

- (7) 身近で簡単な事柄に関する短い話を聞いておおよその内容が分かったりする活動。

本単元の言語活動は、絵本を活用して動物を見つけることである。動物が森の中でかくれんぼをしているという状況において、動物の体の一部が見つかったという場面で、隠れている動物を見つけることを目的にした活動である。

本時には、色や形、状態を表す語を手がかりとして聞きとり、動物を見つける活動を行う。第2時なので、聞くことを重視し、その後の児童同士のやり取りにつながる力の育成を目指す。

言語活動は、中学年で高学年でも、児童にとって身近で簡単な事柄を扱う。高学年では、「自分のこと」などという視点も加えていく。

⑤ 本時の言語活動の精度を高めるために必要な意欲喚起

- ・児童の問いに沿った課題の設定を目指し、導入でT1の好きな動物当てクイズを行い、「何を聞けば動物があてられるのかな。」という問いが、児童から生まれるように考える。
- ・「色や形、状態など」を表す語を強調するのではなく、自然に言い、思考対象を児童自身が考えられるようにする。
- ・動物当てクイズでは、個々に答えとなる動物を考えた後、グループで答えを確かめ合う活動をするので、安心して思考、判断し、自信を高められるようする
- ・絵本を活用する際には、ジェスチャーを交えて読み聞かせをする。
- ・ピクチャーカードを提示したり、リズムに合わせて練習したり、ジェスチャーをつけて色や形、状態などを表す語の意味とつながるようにしたりして、視覚・聴覚・触覚を生かした指導を行い、その後の言語活動につなげられるようにする。

⑥ 実践・検証（●成果、▲課題、★改善案）

ア 育成を目指す資質・能力

- 仲間が好きな動物について、ある児童は、指導者が“I see something square.”と言った文を聞いた時点では迷いがあったが、“I see something black.”と言った文を聞き、形と色を組み合わせ、cow という答えを導き出した。またある児童は、指導者が、“I see something round.”と言ったのを、“I see something long”と聞き間違えていたが、続く“I see something green.” “I see something big.”という文を聞き、色と状態を表す語を正しく聞いたことで、“dragon”という答えにたどり着くことができた。このことから、この実践における目指す資質・能力の「絵本の内容に関するクイズを聞いて、色や形、状態などを表す語を手がかりとして、仲間が好きな動物が何か表す」という捉えは適切であると考えた。そして、そのような力が児童に身に付いていたと言える。

- ★色や形、状態などのいずれか一つを聞き取ることで、動物を当てる姿を想定したが、特徴が似ている動物があり、一つだけの聞き取りでは、答えを導き出すことは難しかった。児童の様子からも、色や形、状態などを表す語を組み合わせ、思考、判断していることが伺えた。

- ★色や形、状態などを聞き取る資質・能力の育成に向けて、開発時は、教材に何度も出てくる“I see something ~”がヒントになると考えた。しかし、実践では、色や形、状態などを表す語を直接的に聞き取る様子が見られた。中学年で、英語の音やリズムに十分慣れ親しみ、自分や身の回りの範囲での語句を聞き取る力を身に付けさせることが、高学年での「基本的な表現」「具体的な情報」を聞き取る資質・能力の育成につながると考えた。発達段階に応じた高度な聞く力の基礎となることを大切に、特に、中学年で、丁寧に聞く力を育てていく必要がある。

イ 言語活動

- 「かくれんぼ」が、児童にとって身近な遊びだったので、隠れている動物を見つけるという目的が分かりやすかった。
- 児童にとって、絵本は場面や状況を把握しやすかった。また、拡大コピーを掲示することで、児童は、その場面や状況に浸ることができた。

- 目的や場面、状況等の設定が児童に適切だったので、目指す資質・能力の育成につながった。中学年でも高学年でも、児童にとって身近で簡単な事柄を扱っていくことが大切である。そして、高学年では、その中に、「自分のこと」という視点を加えていくことが望ましい。
- クイズで扱う動物をクラスの仲間の好きな動物とした。そのため、仲間の好きな動物が知りたいという気持ちや、自分の好きな動物が取り上げられるかなというわくわくした気持ちで、言語活動に取り組んでいた。
- ▲★言語活動では、思考、判断する対象の動物を3つ程度に限定した。児童のレディネスによっては、動物の数を限定せず、登場するすべての動物を対象にすることも考えられる。
- ウ 言語活動の精度を高めるために必要な意欲喚起
- 導入時のT1の好きな動物当てクイズで答えを確かめた後、「どんな言葉に気を付けて聞いたの？」という問いかけをした。そこで、“White.”「色」という発言があり、本時の「どんな言葉に気を付けて聞くと、仲間の好きな動物が分かるかな。」という課題設定に結びついた。
- 個人で思考、判断した動物について、色や形、状態などの語を根拠に話し合うことができていたグループもあった。
- ▲答えの動物だけを出し合って、根拠となる色や形、状態などについて話し合っていないグループがあった。
- ★話し合う視点を持っているグループを紹介し、その視点を共有する手立てを行うと、思考力や判断力をより深められたと考える。
- ピクチャーカードだけを見て、単語が言えたり、ジェスチャーで表せていたり、“scary”という語を思い出そうとするときに、多くの児童がそのジェスチャーをして思い出そうとしていた。そのジェスチャーから最初の音（s）を思い出し、“scary”という言葉が発話できていた。視覚・聴覚・触覚をバランスよく取り入れたことで意欲を喚起しながら語を習得し、言語活動での発話につながられた。

⑦ 改善案

授業の開発、実践、検証を踏まえ、次のような授業を提案する。改善点を★と太字で、⑥の視点ア～ウに関わって特に大切にしたいポイントを太字で表示した。

ア) 単元の指導計画（全4時間）

時間	目標	主な活動	評価（評価方法）重点◎					
			聞くこと			話すこと[発表]		
			知	思	学	知	思	学
1	・日本語と英語の音声やリズムなどの違いに気付く。	・Who are you? クイズ（教師の好きな生き物） ・絵本の絵を見て、どんな動物がいるか、想像する。 ・動物の言い方を練習する。 ・色や形、状態などを表す語の練習をする。	◎					
			・日本語と英語の音声やリズムなどの違いに気付いている。（行動観察）					
2	・絵本などの内容に関するクイズを聞いて、色や形、状態などを表す語を手がかりとして、仲間が好きな動物が何か答える。	・絵本の読み聞かせを聞く。 ・ミッシングゲーム（色や形、状態など、動物を表す語に慣れ親しむ。） ・仲間が好きな動物当てクイズ（絵本に登場する動物）に答える。	◎					
			・絵本の内容に関するクイズを聞いて、色や形、状態などの手がかりを結び付け、仲間が好きな動物が何か答えている。（行動観察）					

3	・絵本などの短い話やクイズを聞いて、色や形、状態などを表す語を手がかりとして、何の動物のことか答える。 ・伝えたい動物について、色や形、状態などを表す語を用いて話す。	・色や形、状態など、動物を表す語句の復習ゲームをする。 ・絵本の読み聞かせを聞く。 ・”Who are you?” “Are you ~? Yes, I am.”などの表現を練習する。 ・Who are you? クイズ（児童の実態に応じて、教材のページを限定する。）	○				◎	
4	・Who are you? クイズを通して、色や形、状態などを表す語を用いて、動物を答える。 ・相手に伝わるように、ジェスチャーを用いながら、ヒントの文や尋ねる文を言おうとする。	・Who are you? クイズを行う。（児童の実態に応じて教材以外の動物も含める。） ・学習を振り返る。			○		◎	○
			・Who are you? クイズを通して、色や形、状態などを表す語を用いて、動物を答えている。（ワークシート、行動観察） ・相手に伝わるように、ジェスチャーを用いながら、ヒントの文や”Are you ~?”と尋ねる文を言っている。（行動観察）					

イ) 本時の指導（第2時）

- ・目標：絵本の内容に関するクイズを聞いて、色や形、状態などを表す語を手がかりとして、仲間が好きな動物が何か表す。
- ・評価基準：絵本の内容に関するクイズを聞いて、色や形、状態などを表す語を手がかりとして思考し、仲間が好きな動物が何か表わしている。

【思考力、判断力、表現力等】

時間	児童の活動 S: 目指す児童の反応	指導者の活動	・指導上の留意点 ◎評価（方法）
3分	○あいさつをする。 ○ “Hello!” をジェスチャーをつけて歌う。 ○ Yes/No/ February/ Cloudy など	○あいさつをする。 ○児童の様子を観察しながら一緒にジェスチャーをつけて歌う。 ○ T1: Is it sunny? / Is it February or March? / Is it sunny or cloudy? など	・ “Hello!” の歌（CD）をかけ、一緒に歌いながら楽しい雰囲気を作り、笑顔であいさつをし合い、人間関係も広げる。 ・ yes, no question か、or question で児童に負担をかけない方法、順番で発話を促す。
7分	・絵本の読み聞かせを聞きながら、色や形などをヒントに動物を見つけ、指でさす。（ウ） ○どんな動物の名前が聞こえたか共有する。 S: Snake? / ヘビ?	○ T2: 絵本を読み聞かせる。 T1: 「どんな動物が出てきたかな。」 ○動物の名前を英語で発音する。 T2: A snake.	・ T1: 絵本の拡大コピーを貼る。（イ） ・ T2: ピクチャーカードを黒板に提示する。 ・ ジェスチャーを使ったり、絵の一部を隠したり、児童に動物を見つけさせたりし、興味を喚起し、絵本に引き込み、知識・技能を活用させる工夫をする。（ウ） ・ T2: ピクチャーカードを指しながらリズムボックスを用いて、強勢や発音に気を付けながら発音する。（ウ）
3分	・動物の名前を、英語で発音練習する。後に、ジェスチャーを付けながら発音する。（ウ）	○ T2: 動物の名前を、英語で発音する。	
5分	○本時の課題をつくる。 ○ヒントの文をよく聴く。 ○グループで話し合う。	○ T2: 教材に登場する動物の中で、T1の好きな動物について “I see something ~ .” とヒン	

	S: 色とか、形とか・・・。	トを出し、その動物を推測させる。 ○T1: どんな言葉に気を付けて聞くと、仲間の好きな生き物が分かるかな。	
	どんな言葉に気を付けて聞くと、仲間の好きな動物が分かるかな。		
8分	○前時の復習 ・英語らしい音声やリズムで、ジェスチャーを用いながら繰り返す。(ウ)	○T2: 教材に登場する動物の中で、T1の好きな動物について“ I see something～.”などとヒントを出し、その動物を推測させる。(2回目) ○T2: 色や形、状態などを表す英語を、絵やジェスチャーを用いながら復習する。 ○T1&T2: 色や形、状態などを表す英語を用いた、ミッシングゲームをする。	・見通しについての気づきを拾う。
12分	・教材の絵を見て、指導者の英語を聞きながら、それぞれの動物を指さしたり、英語や、日本語、ジェスチャーで表したりする。(ア、イ、ウ) S: Rabbit?/ウサギ? ジェスチャー	○教材の絵を見せながら、指名された児童の何人かが好きな動物について、指導者が“ I see something～.”と言う。 T1: 指名する T2: 児童の好きな動物について下のように言う。 I see something long. I see something small. I see something white.	・T2: 絵やジェスチャーを児童に考えさせたり、示したりしながら言う。(ウ) ・リズムボックスなどを用いて練習することで、強勢やリズムに慣れ親しませ、聞く力の基礎を身に付けさせる。(ア、ウ) ・T1: 分かった段階で、教材の絵を指で指すように指示する。(ウ) ★児童の実態によって、児童が見る絵本のページを選ぶ。(イ) ★4人程度のグループで活動させる。動物を選んだ根拠について根拠を話し合うように促す。(ア、ウ) ◎絵本の内容に関するクイズを聞いて、色や形、状態などを表す語を手がかりとして思考し、仲間の好きな動物が何か表わしている。(行動観察: つぶやき、指さし、ジェスチャー) ・T1: T2がヒントを出している間、児童の姿を見取る。 ・T2: 矢印を板書し、概念化を図る。 ★課題について個人で考えを持たせ、グループ活動に入らせる。(ア)
3分	・課題についてグループでまとめる。(ア、ウ) S: 色や形、状態などの言葉に気を付けて聞いたらどんな動物がかくれているか分かった。	○T2: 課題についてまとめを行う。	・T2: 矢印を板書し、概念化を図る。 ★課題について個人で考えを持たせ、グループ活動に入らせる。(ア)
3分	○今日できたこと、次にもっと頑張りたいことを振り返り、シェアリングする。 S: 色とかに気を付けて聞けた/発音ができるようになった。/これからもっといろいろな言葉を知っていきたい。	○T1: 今日できたことや次にもっと頑張りたいことを振り返り、シェアリングさせる。	・児童が自分でできたことを意識させる。 ・教師や仲間が、できたことを認める。
1分	○“Thank you!...sensei.”を言う。	○T1&T2: 褒めながら、励まししながら挨拶する。	・必ず全員とアイコンタクト、または握手をする。

(2) 第6学年 単元名 Junior High School Life

〈教材 We Can!2 Unit 9 Junior High School Life〉

*8時間扱いの単元の5時間目に実践を行う。

① 単元の目標

ア 中学校の部活動や学校行事、教科などの語やそれらを伝える文について聞いて意味を理解したり、言ったりすることができる。【知識及び技能】

イ 中学校の部活動や学校行事、教科などについて自分の考えを整理し伝え合う。

【思考力、判断力、表現等】

ウ 他者に配慮しながら、中学校生活について伝え合おうとする。

【学びに向かう力、人間性等】

② 該当する学習指導要領における主たる領域別目標

聞くこと	イ ゆっくりはっきりと話されれば、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、具体的な情報を聞き取ることができるようにする。
------	---

③ 育成を目指す資質・能力

—該当する学習指導要領における内容—

【思考力、判断力、表現力等】

情報を整理しながら考えなどを形成し、英語で表現したり、伝え合ったりすることに関する事項

ア 身近で簡単な事柄について、伝えようとする内容を整理した上で、簡単な語句や基本的な表現を用いて、自分の考えや気持ちなどを伝え合うこと。

本時に育成を目指す資質・能力（「聞くこと」（思考力、判断力、表現力等））を次のように考えた。

・中学生のスピーチや仲間の英語を聞いて、先輩や仲間の考えと自分の考えを比較し、新たな考えを取り入れるなどしながら、自分の考えを整理する。

指導者や中学生の先輩、仲間の英語を聞いて、もともとの自分の考えと比較し、自分の考えを改めたり強めたりして、再構築する資質・能力を目指した。その資質・能力が、中学校や高等学校の「必要な情報を聞き取ることができる」資質・能力につながっていくと考えた。

④ 言語活動

—該当する学習指導要領における内容—

言語活動に関する事項

ア 聞くこと

(ウ) 友達や家族、学校生活など、身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現で話される短い会話や説明を、イラストや写真などを参考にしながら聞いて、必要な情報を得る活動。

本単元の言語活動は、中学校で入部したい部や楽しみな行事、頑張りたい教科についてスピーチを作り、互いのスピーチを聞き合うことである。中学入学を目前に控えた状況において、互いのスピーチを聞き合うという場面で、他者の思いを知り、自分の考えを確かめることを目的にした活動である。

本時は、仲間の入りたい部や楽しみな行事と、それらの理由を英語で伝え合い、それを聞き取り、新たな考えを取り入れるなどして、思考を整理する活動を行う。第5時なので、単元のゴールに向かい、指導者や中学生の先輩、仲間の英語を聞いて、自分の思いの理由を英語で発話することにつながる力の育成を目指す。そして、第5時から第7時にかけて、上記の言語活動を繰り返すことで、資質・能力の育成を目指すこととした。

中学校での、「自然な口調で話される英語を聞いて」という言語活動につながるように、中学生や指導者の使用する英語をできる限り自然な口調に近づけていく。

⑤ 言語活動の精度を高めるために必要な意欲喚起

- ・児童の問いに沿った課題を目指し、導入で取り入れるスモールトークの内容を工夫する。多くの生徒の入学先である沖縄中学校の実際の部活動や行事についての内容を扱う。
- ・スモールトークで、児童の発話に役立つ表現を指導者が使用するようにする。
- ・ピクチャーカードを提示したり、リズムに合わせて練習したり、ジェスチャーをつけて動詞の意味を表わしたりして、視覚・聴覚・触覚を生かした指導を行い、その後の言語活動につなげられるようにする。
- ・課題設定やまとめの場面で、個人で思考した内容をグループで安心して話し合えるようにすることで、「伝えられた、分かった。」という自信を高め、本時や次時の言語活動へ意欲につなげる。

⑥ 実践及び検証（●成果、▲課題、★改善案）

ア 育成を目指す資質・能力

- スモールトークで、指導者は、“I like volleyball.” “I want to be a volleyball player.” “I can dance.” という表現を使用した。それらを聞いた児童が、言語活動において、“I like basketball.” “I can (play) basketball.” “I like sports. I can run.” “I like ヒストリー. I want to enjoy school trip.” “I want 知りたい 職場を.” と発話していた。既習事項や指導者の英語を聞き、活用したり、自分の考えを日本語を混ぜながらもなんとか伝えようとしていた。高学年での「具体的な情報を聞き取ることができる」資質・能力を、中学校や高等学校の「必要な情報を聞き取ることができる」資質・能力につなげていくことを意識した継続的な指導が必要である。

- 指導者の自然な口調に近づけた英語を聞いて、部活動や行事、理由について聞き取れていた。中学への滑らかな接続を目指し、実態を把握したうえで、できる限り自然な速さの英語に慣れさせていきたい。

- ▲★言語活動において、互いに理由の文を英語で言おうとしない児童が多かった。そのため、英語による言語活動での思考力、判断力、表現力等の育成が出来なかった。英語使用を促す言語活動や意欲喚起の更なる工夫が必要である。

- ★スモールトークで、指導者が“I can dance.”と言ったのに対し、児童は“I like dance.”と聞き取っていた。can と like の聞き間違いを、発話につなげるチャンスととらえ、「理由を伝えるときに、“I like dance.” と “I can dance.” ではどう違うの。」と児童に問い、言語活動で具体的に活用できるように指導することで、資質・能力の育成につながったと考える。

- ★「友達は“I want to join sports club. I like トランボリン.” というように、得意なものを選んでいたから、ぼくも得意なものを頑張ろうと思った。」友達の“I want to enjoy school festival. I can play 他のクラスの人たちと一緒に together.”を聞いて、楽しい行事が職場体験から文化祭に変わった。」というように、自分の考えが変容している児童がたくさんいた。しかし、英語の使用は少なく、日本語によるやりとりでの変容だった。自分の考えを英語で表現する時間を設けることで、目指す資質・能力の育成につながったと考える。

イ 言語活動

- 中学校で入りたい部や楽しい行事、その理由について、仲間の考えを知りたいという思いから必要感を持って、多くの友だちとインタビューをして互いの考えを伝え合っていたので、目的や場面、状況の設定は適切であった。

- ▲理由を英語で伝えている児童もいたが、日本語で伝えるにとどまっている児童も多かった。課題についてのまとめでも、「I like や I can の後をちゃんと聞く。」との気づきにとどま

っており、理由を表す表現をどう再構築するか具体的に考えられなかった。そこで、以下が改善案として考えられる。

- ★語句（動詞）練習の際、日本語や絵だけを見せて、児童に英語をアウトプットさせる。

- ★言語活動に入る前に、理由を英文で表現するために、いくつか英文の例を児童のつぶやきから取り上げる。

- ★言語活動の途中で、課題への意識付けや全体での学びの共有をする。

- ★言語活動の際、音声だけの会話ではなく、ジェスチャーを付けながら英語で言おうとさせる。自分の思いを伝えるために、ジェスチャーで表すことが効果的だと意識付ける機会を持つとよかった。（ウに関連）

- ★普段から、スモールトークなどで、知っている英語で表現する活動を仕組んでいく。

ウ 言語活動の精度を高めるに必要な意欲喚起

- 多くの生徒の入学先である沖縄中学校の実際の部活動や行事についての内容について、スモールトークを行ったことで、児童の興味・関心を喚起し、「聞く」必然性を持たせることができた。

- ★中学校の英語の授業で、「学校紹介」や「部活動の大会や各種学校行事後の感想」を英語でスピーチする際、視覚情報を伴ったスピーチにし、その映像を小中学生に見せるようにする。知っている先輩が英語を話している映像を見ることで、意欲を高めさせる。

- ★課題設定の場面で、教師主導で課題を提示してしまった。そのため、「どんな言葉に気を付けて聞くと、友達の考えがくわしく分かるかな。」という問いが、児童自身の問いになりきらずに、言語活動の場面において、課題意識が薄れてしまった。「どうして～さんはその部に入っていたり、その行事が楽しかったりするのかな。」と理由を表す内容を聞き取ることに着目させる問い返しが必要だった。そして、理由を英語でどのように表現したらいいか具体的な見通しを持たせられるとよかった。その後も、課題を常に意識させる工夫をしていくことで、確かな学びが得られ、資質・能力を高めることができるのではないかと考えた。

- ★言語活動の前に、短時間でもグループ活動で、自分の理由を英語でどう表現するか、話し合いの場を設けることで、全員が安心して話すことにより、自尊感情を大切にしたい自信を高めることができ、自己表現をしようとする意欲につながるのではないかと考えた。

⑦ 改善案

授業の開発、実践、検証を踏まえ、次のような授業を提案する。改善点を★と太字で、⑥の視点ア～ウに関わって特に大切にしたいポイントを太字で表示した。

ア) 単元の指導計画（全8時間）

時間	目標	主な活動	評価（評価方法）重点◎					
			聞くこと			話すこと[発表]		
			知	思	学	知	思	学
1	・中学校生活についての話を聞いて、具体的な情報を聞き取ることができる。	○スモールトーク 「中学校生活について」 ○【Let's Watch and Think 1】 【Let's Watch and Think 2】 ○【Let's Listen 1】（単元のゴールイメージを持つ。）	◎			○		
			・中学校生活について、聞き取れた行事名、教科、部活動などについて仲間に伝えることができる。（教科書）					
2	・短い話を聞いて具体的な情報を聞き取り、理解し、入りたい部活動を言うことができる。	○【Let's Watch and Think 1】 【Let's Watch and Think 2】を再度視聴する。 ○語句練習をする。（部活名、行事名、教科名、動詞句） ○【Let's Listen 2】 ○中学校で入りたい部活動をペアで伝え合う。 A: What club do you want to join?	◎				○	
			・短い話を聞いて具体的な情報を聞き取ることができる。（教科書） ・入りたい部を言うことができる。（行動観察、振り返りシート）					

		B: ~club. 上の会話ができれば、Why?を使って理由を聞き、答えることを促す。理由の文は、既習事項を使い英語で言わせたり、学び合わせたり、教師が教えたりする。※ ○【Let's Read and Write】(Unit9-1)を書く。 ○チャンツ	
3	・中学校の学校行事についての話を聞いて、具体的な情報を聞き取り、楽しみな学校行事を言うことができる。	○チャンツ ○スモールトーク（行事） ○語句練習をする。 ○【Let's Listen 3】【Let's Watch and Think 3】 ○中学校の学校行事についてやりとりをする。 A: What event do you want to enjoy? B: I want to enjoy ~. ※第2時と同様 ○【Let's Read and Write】(Unit9-2)を書く。	◎ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ○ ☐
4	・中学校の先生たちについてのスピーチを理解し、頑張りたい教科を言うことができる。	○チャンツ ○語句練習をする。 ○【Let's Watch and Think 4】 ○中学校の教科についてやり取りをする。 A: What subject do you want to study hard? B: I want to study ~hard. ※第2時と同様 ○ワークシートを書く。	◎ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ○ ☐
5 本時	・中学校の部活動や学校行事についてその内容と自分の考えを比較し、新たな考えを取り入れるなどしながら、自分の考えを整理し、伝え合うことができる。	○チャンツ ★中学生による中学生生活の説明映像（視聴（ウ）） （中学校言語活動：「話すこと（イ）」） ○語句練習をする。 ○楽しみな行事や入りたい部ワークシートに書く。 ○インタビュー（理由の文に使えるような表現を増やす。）	◎ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ○ ☐
6	・中学校生活についてのスピーチや仲間の話を聞き、その内容と自分の考えを比較し、新たな考えを取り入れるなどしながら、自分の考えを整理し、伝え合うことができる。	○チャンツ ○第5時で行ったインタビューに「頑張りたい教科」を加えて、相手を変えて行う。 ○【Let's Listen3】【Activity】（理由の文に使えるような表現を増やす。） ○自分のスピーチを書く。	◎ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ○ ☐
7	・入部したい部や楽しみな学校行事、頑張りたい教科について伝え合い、その内容と自分の考えを比較し、新たな考えを取り入れるなどしながら、自分の考えを整理し、伝え合うことができる。	○チャンツ ○スモールトーク 「教師の中学生生活の思い出」 ○語句練習をする。 ○【Let's Listen4】（理由の文に使えるような表現を増やす。） ○互いのスピーチを聞き合う。 ○より良い自分のスピーチを完成する。	◎ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ○ ☐

8	・他者に配慮しながら、中学校生活について自分が入部したい部や楽しみな学校行事とその理由、頑張りたい教科についてスピーチしようとする。 ・仲間の話を聞いて具体的な情報を聞き取ることができる。	○チャンツ ○スピーチ発表の練習をする。 ○スピーチを発表する。 ○単元を通しての学びを振り返る。	○ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ◎ ☐
★【小中連携】 中学生にスピーチ原稿を読んでもらい、内容についてのコメントやメッセージを書いてもらう。 （中学校言語活動：「読むこと（イ）」、「書くこと（イ）」） 中学生からもらったコメントを読み合う。			

イ) 本時の指導（第5時）

- ・目標：中学校の部活動や学校行事についてその内容と自分の考えを比較し、新たな考えを取り入れるなどしながら、自分の考えを整理し、伝え合うことができる。
- ・評価基準：中学生による中学生生活の説明映像を見たり仲間の話を聞いたりして、先輩や仲間などの考えと自分の考えを比較し、新たな考えを取り入れるなどしながら、自分の考えを整理し、伝え合うことができる。

【思考力、判断力、表現力等】

時間	○児童の活動 S:目指す児童の反応	指導者の活動	・指導上の留意点 ◎評価（方法）
2分	○あいさつをする。 ・チャンツ “What do you want to do in junior high school? (ウ)”	○あいさつをする。 ○児童の様子を観察する。	・楽しい雰囲気を作り、笑顔であいさつをし合い、人間関係も広げる。
3分	★沖郷中学校にある部活動や行事についての話を聞く。(ア、ウ)	○T1:「沖郷中学校での実際の生活について、どんな部活動、行事があるのかを聞きましょう。」 (児童に聞き、予想させる) T1: What club can students at Okigo junior high school join?/What event do they enjoy? ○児童たちに教え合いをさせ、状況を見て、2回目以降視聴させる。	・会話を聞く前に予想させることで聞く必然性を持たせる。 ★知っている先輩が英語を話している映像を見せ、意欲を高めさせる。自分もできるようにするというセルフイメージを持たせる。(ア、ウ) ・質問をしたり、ジェスチャーを活用したりしながら、理解を確かめる。
4分	★グループで分かったことを話し合う。(ウ) ○課題をつくる。 S:「理由の文/好き、でき	○児童たちで教え合いをさせ、状況を見て、2回目以降視聴させる。 ○理解を確かめ、全体で共有する。 ○T1: 沖郷中学校にはどんな部活動がありますか。／～さんは何部ですか。 T1: 沖郷中学校では、どんな行事を楽しめますか。／～さんが楽しいと感じている行事は何でしたか。 ○T1: どうして～さんは、その部活動に取り組んだり、その行事が楽しかったりするのかな。 ○T2: どんな言葉に、気を	★どんなことが聞き取れたか、児童同士で相談する時間を設け、全体で確認する。(ア、ウ) ・児童のつぶやきを大事に扱

	るなど」	付けて聞いたら、わかるかな。	う。児童から出されない場合は、T2が引き出す。
	どんな言葉に気を付けて聞くと、友達の考えが詳しくわかるかな。		
3分	★グループで話し合う。(ア、ウ) S:「バレーボールが好きだからピアノが弾けるから」	○会話をくり返す ○T1:「どうして～さんは、その部活動に取り組んだり、その行事が楽しかったりするのかな。」 ○T2:中学生や仲間の話のどんな言葉に気を付けて聞くと、友達の考えが詳しくわかるかな。	★どんなことが聞き取れたか、児童同士で相談する時間を設け、全体で確認する。(ア、ウ) ・児童のつぶやきから、理由で使えそうな動詞句を板書する。 ・理由の文にある動詞句に着目させ、見通しを持たせる。
5分	★動詞句をリズムに合わせ、正しい発音や強勢に気を付けながら、ジェスチャーを付けて言う。(ウ)	○T2:ジェスチャーやピックチャーカードなどを用いながら、語を発音したり、児童に発音させたりする。 T1:児童の様子を見ながら、既習の音に気付かせたり、発音させたりする。	・リズムボックスなどを用いて、テンポよく行い、集中力を途切れさせない。 ★ピックチャーカードをフラッシュカードにして、日本語や絵だけを見せて、児童に英語を発話させ、アウトプット力につなげる。(イ)
6分	○ワークシートに楽しみな部活動や行事について書く。 I want to join the ~ club. I want to enjoy ~.	○T1:「沖郷中学校に入ったらどんな部に入り、どんな学校行事を楽しみたいか、理由(日本語でも可)も考えて書きましょう。」 T2:ワークシートを配る。	・書き終わった児童には、理由を英語で言うように促す。 ・机間指導し、理由となる表現についてのつぶやきを拾い、板書し、全体の学びにつなげる。(イ)
12分	○前時までで習った表現について思い出す。 ★理由の表現を英語で考える。(ア、ウ) ○尋ね方、答え方、理由の尋ね方をリピートする。 ○隣同士で会話練習をする。 A: What club do you want to join? B: I want to join the brass band team. A: (Sounds nice.) Why? B: I like music. A: (I see.) What event do you want to enjoy? B: I want to enjoy School Trip. A: Why? B: I want to go to Tokyo Disneyland. A: Nice! Thank you! (交代する) ・教室を歩いて回り、入部したい部、楽しみな行事、それらの理由について様々な仲間と、ジェスチャーも	○T1:「入りたい部や楽しみな行事について尋ねるとき、理由を尋ねるときはどれくらいよかったかな。」 ○T2:尋ね方と答え方、理由の尋ね方をリピートさせる。 ○T1:「隣の人と伝え合ひましょう。」	★自然な口調の英語を話すようにする。(ア) ・机間指導で会話ができるように支援する。 ・コミュニケーションの原則、アイコンタクト、反応、挨拶をていねいにするように指導する。

	つけて、伝え合う。(ア、ウ)	いましょう。なるほど、と思えたり、新たな情報が得られたりするといいいね。」 ○相手を自由に選ばせ、会話をさせる。 ○机間指導する。	★課題意識が薄れてしまった場合は、活動を中断し、課題を振り返らせ、疑問や学びを共有させる。(ア、イ、ウ) ○仲間の考えを聞いて、具体的な情報を聞き取ることができている。 (観察、ワークシート) ○自分の考えを伝えることができている。(観察) ○先輩や仲間などの考えと自分の考えを比較し、新たな考えを取り入れたりしながら、自分の考えを整理している。(ワークシート) ・児童が自分でできたことを意識できるように支援する。 ・教師や仲間が、できたことを認める。 ★次時への目標を持たせる。(ア)
3分	○席に戻り、ワークシートに記入する。	○T1:「友達と話をし、中学生のスピーチを聞いて、今の自分の考えについて書きましょう。」	
3分	○課題について、学びをまとめる。 S:「理由の文 (like/ enjoy / can ~ / want to ~ など) に気を付けたら詳しく分かった。」	○T2:「どんな言葉に気を付けて聞いたら、友達の考えが詳しくわかりましたか。」	
3分	○今日できたことを振り返りシートに記入し、シェアリングをする。 S:「～さんの理由(話)をきいて私は・・・が楽しかったけど、もっと楽しみのようになった／～さんのように・・・が楽しみのようになった／もっと大事なところをはっきり話したい。」	○T1:「振り返りシートを書きましょう」 ○時間をみてシェアリングをさせる。 「中学生生活についてどのような思いが強くなったか／これからもっとできるようになりたいこと」などの視点で書かせる。	
1分	○「Thank you!...sensei.」を言う。	○褒めながら、励ましながらかき混ぜる。	・必ず全員とアイコンタクト、または握手をする。

IV 研究のまとめ

三つの視点を大切に単元や授業を開発、実践、検証を行い、「魅力ある授業」についての捉えが更新された。「魅力ある授業」について、研究前は、指導者が『「これならできそうだな、おもしろそうだからやってみようかな」と思える指導方法が分かったり、活動内容が楽しそうだったりする授業』と捉えていた。しかし、今は『「こんな力を身につけさせたいから、こんな活動・授業をやってみよう」と目指す資質・能力やその育成のための言語活動、意欲喚起が明確な授業』と考えるようになった。

これまでの研究から、三つの視点について、検証を経て明確になったポイントについて述べる。これらを大切に「魅力ある授業」を作ることが、滑らかな小中高連携につながると考える。

1 資質・能力

(1) 児童生徒の姿で評価規準を具体化する

育成を目指す資質・能力は、その資質・能力を培った児童生徒の姿で具体化する必要がある。指導者がその姿を明確にイメージしていることで、指導中に、形成的評価を重ね、必要な指導をし、目指す資質・能力の育成に近付いていくことができる。

(2) 言語活動や意欲喚起の更新

目指す資質・能力は、目的や場面、状況等を明確に設定した言語活動によって育成していく

ことが重要であり、どんな言語活動や意欲喚起が必要かを考え、指導の中で実践していかなければならない。

(3) 小中高連携

本研究では、「聞くこと」の思考力、判断力、表現力等の育成を考えたが、各領域の資質・能力においても、小中高それぞれの段階における目指す児童生徒の姿を明確にし、指導にあたることが滑らかな小中高連携につながる。

2 言語活動を実態・ねらいに沿って工夫する

(1) 必然性や目的がある場面設定

児童生徒の実態を適切に把握し、ねらいに沿った必然性のある言語活動を仕組むことで、より資質・能力を高めることができる。

(2) 状況の明確な設定

児童生徒の実態や題材に適した方法で、場面や状況をより明確にしていくことで、児童生徒が達成感を持つことができ、資質・能力の育成につながっていく。

(3) 小中高連携

学習指導要領に示されている言語活動例は、それまでの児童生徒の学びを踏まえて示されている。学びがつながるように意識して言語活動を設定したり、必要によっては、前学校段階における学習内容の定着を図るために、児童生徒の実態を踏まえ必要な言語活動を繰り返したりして、学びの接続を意識した指導を行っていく。

3 意欲喚起を継続して行う

(1) 各段階における動機づけ

① 課題（探究型学習）

行動前段階で、質の高い学びにつながる児童の問いを引き出して、課題として共有し、見通しを持ち、行動段階において言語活動に取り組む。活動中、課題解決を意識的にを行い、まとめをする。課題設定の場面で、いかに児童生徒が問いを抱けるようにするかが、指導者の工夫点である。また、行動段階で、児童が課題を意識しているか、指導者が常によく観察し、評価をしていかなければならない。

② 自信を持たせる

行動段階では、自尊感情を大切にするために、グループでの話し合いを多く取り入れ安心して話せる工夫をし、達成感を持たせ、自信を高めていく。

(2) 視覚・聴覚・触覚

ピクチャーカードを見せ（視覚）、音声を聞かせたり言わせたりし（聴覚）、ジェスチャーをさせたり、カードや実物などを触らせたりして（触覚）、3つの感覚を生かす工夫をすることで、すべての児童生徒の意欲を喚起する。

V おわりに

半年の研修期間で、山形県教育センターの「小学校英語教育に係る学校ニーズへの対応」の調査研究の一端を担わせていただき、研究を深めることができた。IVにあげた内容は、学びの一部に過ぎない。

「EIGO（英語）からI（愛）を取ったただのEGO（エゴ）」という考えを、初任時よりずっと胸に抱き、自分を振り返ってきた。英語は言葉というコミュニケーションの一つの手段である。

その言葉を使う人の心が育たなければ、言葉は、人を傷つける刃になってしまうこともある。そのため、生徒には、自分にも周りの人にも優しさや思いやりのある心で言葉を使い、自分も周りの人をも幸せにできる人になってほしいと考えてきた。そのような生徒を育てられるように、私自身が人間性を高め、常に、「愛」を持って生徒と共に学ばなければならないと思い、様々な研究会で同志と共に学びを深め、生徒と共に、心を育てる英語の授業づくりに努めてきた。自分や仲間の良さを英語で伝え伝え合ったり、地球環境を守るため、また、世界の困難な状況に置かれている仲間のためにできることを英語で考えて発信したり、人やもの、ことへの深い感謝について英語を使ってスピーチしたりするを通し、生徒の心の成長を見ることが幸せでたまらなかった。そのような成長ができる英語という窓を、多くの児童生徒の心に作りたい、と願ってきた。

本研究で、その願いの実現のためのヒントを、三つの視点として見つけることができた。それらをまとめたこの報告書が、児童の英語という窓づくりに役立つようにと願っている。

山形県教育センターの先生方のお考えや小学校の先生方の児童一人ひとりへのご指導の中に、「全員に英語が分かるようになってもらいたい。」という深い愛があった。小中高連携において、目指す資質・能力を児童生徒の姿で具体的にとらえ、実態を把握して指導していくことが重要であり、学習指導要領には、育成を目指す資質・能力や言語活動例は明記されている。しかし、示されている目標を真に実現するには、目指す姿を適切に捉え、その姿を実現させる指導力と、児童生徒一人ひとりへの愛が不可欠である。

研究で得た三つの視点を常に指導に生かし、検証を重ね、これからも、生徒の心を育てる授業づくりに励みたい。また、地区や県の外国語部会や研究会において、視点についての成果を多くの先生方と共有し、共に学び、小中高連携の一助となりたい。そうした研鑽のなかで、「EGO（エゴ）」ではない、「I（愛）」のある「EIGO（英語）」を通し、自分も周りの人をもさらに幸せにできるグローバルな『人財』育成を目指していきたい。

謝辞

最後になりましたが、貴重な機会を与えてくださいました山形県教育委員会、南陽市教育委員会、並びに南陽市立宮内中学校の安藤淳校長先生、ご指導いただきました山形県教育センター柏倉昭夫所長をはじめ諸先生方、調査研究Aーイの太田千春主任指導主事をはじめとする先生方、特に担当として温かく教え導いていただきました渡會美和指導主事に、厚く御礼申し上げます。更に実践校としてご協力いただきました南陽市立沖郷小学校の先生方、調査研究にご協力いただきました東京都江戸川区立一之江小学校、南陽市立宮内小学校、村山市立西郷小学校の先生方、CALAインターナショナル代表の阿部フォード恵子先生に、心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 文部科学省 2018 『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 外国語編・英語編』 文部科学省 p23, pp210-211
- 2) 文部科学省 2018 『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編』 文部科学省 p19, pp27-29, p76, pp98-99, p101, p102
- 3) 文部科学省 2018 『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編』 文部科学省 p18, p55
- 4) 阿部フォード恵子 2019 『小学校英語の活動レシピ』 東京書籍株式会社 p115
- 5) 文部科学省 2018 『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』 文部科学省 p23, pp152-153
- 6) 山形県教育委員会 2018 『平成30年度 学校教育指導の重点』 山形県教育委員会 pp16-17
- 7) 原田隆史 2018 『原田式メンタルトレーニング指導者養成コース資料』

参考文献

- 1) 酒井英樹 2017 『Ready Set Go!』 三省堂
- 2) 奈須正裕 2017 『「資質・能力」と学びのメカニズム』 株式会社 東洋館出版社
- 3) 三浦孝・弘山貞夫・中嶋洋一 共著 2002 『だから英語は教育なんだ一心を育てる英語授業のアプローチ』 株式会社 研究社
- 4) 三浦孝・中嶋洋一・池岡慎 共著 2006 『ヒューマンな英語授業がしたい！—かかわる、つながるコミュニケーション活動をデザインする—』 株式会社 研究社
- 5) 田尻悟郎 2009 『(英語) 授業改革論』 教育出版
- 6) 中嶋洋一 2000 『英語好きにする授業マネジメント 30の技』 明治図書
- 7) 横溝紳一郎 編著 2010 『生徒の心に火をつける』 教育出版
- 8) 『英語教育 2018 2月号・3月号・7月号・9月号・10月号・11月号・12月号』『英語教育 2019 1月号・2月号』 大修館書店
- 9) 工藤勇一 2018 『学校の「当たり前」をやめた。一生徒も教師も変わる！公立名門中学校長の改革—』 時事通信社

(研修B)

1 知的障がい特別支援学級における個別の指導計画を活用した授業づくり

(前期6か月研修) 川西町立小松小学校 教諭 竹田 孝子

知的障がい特別支援学級における 個別の指導計画を活用した授業づくり

川西町立小松小学校 教諭 竹田孝子

山形県内の特別支援学級担任は、特別支援学級担当年数が短い場合が多く、特別支援学校教員免許状を持っている教員も少ない現状で、個別の指導計画の内容はこれでよいのか、子供の実態に応じた授業づくりはどのようにしたらよいのか悩んでいる人が多い。そこで、個別の指導計画作成のための実態把握、目標や手立ての設定、授業づくりへの活用、個別の指導計画の改善について文献研究・調査研究を行い、個別の指導計画を作成する際の留意点を整理した。それに基づき、実践研究では、個別の指導計画を新たに作成した。さらに、個別の指導計画の内容に照らし合わせながら、単元の目標や指導の手立てを設定し授業を行うとともに、授業の検証、改善も行った。その結果、対象児童の学習意欲の高まりや、学習課題について自分で考えたり、分かったことを発表したりする姿が見られ、単元目標の達成につながった。このことから、子供の実態に応じた授業づくりにおいて、個別の指導計画を授業の構想・改善時に活用することの有効性が見られた。

キーワード：個別の指導計画 実態把握 授業改善

Ⅰ はじめに

知的障がい特別支援学級を担当して4年目になる。担任している児童は、学年も違い、それぞれ全く違う個性をもっている。一人一人の実態に応じた授業をどう組み立てていけばよいのか日々悩んでいた。今のこの子供の状態ならばどう対処すればよいのか、特別支援教育関連の書籍を読む毎日、その場その場で何とか対応しているような状態だった。

山形県内の状況を見てみると、私と同じような立場で指導している教員が多い現状にある。特別支援教育に携わっている教員、中でも小学校の特別支援学級の担任は、教職経験は長いが特別支援学級担当年数は5年未満が最も多く（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所、平成26年3月、特別支援学校及び特別支援学級における教育課程の編成と実施に関する研究資料）、平成28年度の特別支援学校教員免許状の保有率も3割程度（山形県教育委員会、平成30年3月、第3次山形県特別支援教育推進プラン資料）というのが現状である。このことから、特別支援学級における子供の実態に応じた授業づくりについての知識や理解が十分ではないため、授業改善の在り方について課題を抱えていると考えられる。

中央教育審議会（2010）は、「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」において、学習指導の改善に向けて学習評価と結びつけながらPDCAサイクルの中で適切に実施されることと、個別の指導計画を、PDCAサイクルを通じて活用し、指導内容・方法の改善に生かしていくことの重要性を示している。また、山形県第6次教育振興計画には特別支援教育の充実が掲げられ「特別な

教育的ニーズに応えるための校内支援体制を強化するとともに、個々の児童生徒について、個別の指導計画や個別の教育支援計画を作成し、次の学びの場に引き継ぐ。」ことが示されている。このことから、授業改善を図る上で、PDCAサイクルを通じた個別の指導計画の活用が必要であると考えた。

勤務地の川西町では、今年度、町で統一した個別の教育支援計画の書式を作成し活用し始めたが、個別の指導計画については、これから検討していく段階である。現在は、特別支援学級担任が、それぞれ個別の指導計画を作成している。特別支援学校とは違い、専門的な知識をもっている教員も少なく、学校に一人という場合もあり誰にも相談できない状況がある。どのように書けばよいのか、そのための実態把握はどのようにしたらよいのかなど分からないことが多く、一人で悩んでいることが、町の特別支援学級担当者会でも話題に出された。

そこで、個別の指導計画の作成の在り方を検討するとともに、個別の指導計画を授業づくりにどのように活用すれば、子供の実態に応じた授業づくりにつながるのかを明らかにすることが重要であると考え、本研究主題を設定し、実践することにした。

II 研究の内容

1 研究のねらい

個別の指導計画を作成する際の留意点を整理し、それに基づいて新たに個別の指導計画を作成するとともに、それを活用した授業実践を行い、その有効性を検証することで子供の実態に応じた授業づくりの在り方を明らかにする。

2 研究の仮説

個別の指導計画を作成する際の留意点に基づいて個別の指導計画を作成し、その内容に照らし合わせながら、単元の目標や指導の手立てを設定するとともに、授業の検証、改善を行えば、知的障がい特別支援学級における個々の子供の実態に応じた授業づくりができるであろう。

3 研究方法

(1) 文献研究

書籍や論文から以下の①～④について調べる。

- ① 子供の実態把握の方法
- ② 個別の指導計画の作成
- ③ 個別の指導計画を活用した授業づくり
- ④ 個別の指導計画の評価、改善

(2) 調査研究

他校の取り組みを視察し、授業参観や担当者から聞き取りを行い、以下の①～④について調べる。

- ① 子供の実態把握の方法
- ② 個別の指導計画の作成
- ③ 個別の指導計画を活用した授業づくり
- ④ 個別の指導計画の評価、改善

(3) 実践研究

- ① 対象とする児童を決め、校内の他の教員などからの聞き取りや観察を通して実態を把握し、個別の指導計画を新たに作成する。
- ② 個別の指導計画をどのように授業づくりにつなげるかを検討し、授業実践を行う。
- ③ 個別の指導計画を活用して授業を改善する。
- ④ 個別の指導計画を活用した授業実践の成果をまとめる。

4 研究の実際

(1) 文献研究

① 子供の実態把握の方法

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編（文部科学省2018）には、「個別の指導計画は、個々の児童の実態に応じて適切な指導を行うために学校で作成されるものである。」と示されている。そこで、個別の指導計画を見直すにあたり、その基本となる子供の実態把握の在り方から見直す必要があると考える。

古川・一木（2016）は、実態把握に際し、教師の主観のみに左右されることがないよう、行動観察だけでなく、保護者や前担任からの情報の聞き取りの必要性を述べている。城（2018）は、複数の目で見えていくことで、より子供の実態に迫り、指導も充実させていくことができると述べている。また、古川・一木（2016）は、客観的に児童生徒を捉える工夫として、自立活動の内容の6区分に沿って把握することを挙げている。このことから、複数の目で実態を捉えることと、実態を自立活動の6区分の内容に照らして整理することで子供の全体像を捉えることが必要であると考えられる。

さらに、海津（2017）は、「子どものつまずきの要因を探っていくことは、支援をどのようにするか考えていく上で非常に重要」と述べており、このことから、個別の指導計画を作成する時には、実態をそのまま捉えるだけでなく、つまずきの要因を捉える必要があると考える。

② 個別の指導計画の作成

「個別の指導計画は、教育課程を具体化し、障害のある児童など一人一人の指導目標、指導内容及び指導方法を明確にして、きめ細やかに指導するために作成する」（文部科学省2018）ものであるため、目標や目標を達成するための手立ての設定の在り方を検討することが必要である。

海津（2017）は、目標を設定する際、自立活動の項目を活用することの有効性を述べるとともに、最終的な目標達成のための具体的な目標を立てることの必要性を述べている。このことから、長期目標を設定するにあたり自立活動の6区分で捉えた実態に基づくことが望ましいと考える。また、長期目標から短期目標へとつながりをもたせること、子供の具体的な姿で考えていくことが必要である。

手立ての設定については、海津（2017）は「子どもの得意な学習スタイルを知ること、手立ては見えやすくなる。」と述べており、学校生活全体を通した学びの様子や検査による認知特性の分析結果等を踏まえて手立てを検討し、設定する必要があると考える。

③ 個別の指導計画を活用した授業づくり

個別の指導計画を活用した授業づくりについて、宮崎・是枝(2012)は、「学習指導案と個別の指導計画との関連付けをより強固なものにし、個々の子どもの教育目標や指導方法、手立てなどを学習指導案の中に明確に位置付け、指導者が意識して取り組むことで、子どもたちの発達が促されていく。」「個別の指導計画の目標と内容、手立てなどを定期的に見極め、日々の授業と関連付けることで、個のニーズに沿った支援が可能になる。」と述べている。このことから、個別の指導計画を日々の授業に生かしていくためには、個別の指導計画に示した目標や手立てなどを学習指導案作成時に関連付けて単元の目標や手立てなどを設定し、指導者が意識して取り組むとともに、個別の指導計画を踏まえた授業の見直しが必要であると考ええる。

④ 個別の指導計画の評価、改善

個別の指導計画の評価、改善について、海津(2017)は、子供の変容や有効な手立てを情報として引き継いでいくことの必要性を述べており、授業での子供の様子から実態の捉え方や目標、手立ての妥当性を検討し、必要に応じて個別の指導計画を改善し、その記録を次につなげていくことが重要であると考ええる。

(2) 調査研究

南陽市立赤湯小学校、米沢市立興譲小学校、天童市立蔵増小学校、山形県立村山特別支援学校天童校、山形大学附属特別支援学校、筑波大学附属大塚特別支援学校を調査対象とした。

① 子供の実態把握

何に基づいて実態把握をしているのか具体的な方法とそこから把握した情報を個別の指導計画にどのように記述しているのかを聞き取った。

実態把握の方法	○本人、保護者からの情報収集 ・ニーズ調査アンケート（保護者対象） ・本人との個人面談（将来や学校生活などについての願い） ・保護者との個人面談（将来や学校生活などについての願い、学校への要望、家庭での様子や関わり方など） ○検査 ・WISC-IV、田中ビネー知能検査、K-ABCⅡ、KIDS 検査、ADL 検査、S-M 社会生活能力検査 ○学校生活の様子に基づく情報収集 ・行動観察 ・日常の会話の中からの情報収集（関係する学校職員や交流学級の子供） ○検討会 ・複数の教員による実態についての話し合い ○外部機関からの情報収集 ・保育園、幼稚園からの引き継ぎ
記述内容	○自立活動の6区分の項目で整理 ○学習を行う上での特性（興味関心、得意・苦手、性格・特性、学習への向かい方） ○検査の分析結果に基づく子供の認知特性

② 個別の指導計画の作成

子供の実態からどのように長期目標や短期目標及び指導の手立てを設定しているのかを聞き取った。

長期目標	○長期目標を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」に沿って整理 ○実態や本人、保護者の願いを踏まえ、3年後または学部卒業時にめざす姿を設定し、それを受けて年間目標を設定 ○自立活動の6区分の実態をベースに設定
短期目標	○短期目標を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」に沿って整理 ○年間指導計画の各教科等の単元を個別の指導計画に記述し、単元ごとの目標を設定 ○特別支援学校学習指導要領の段階表を参考に設定
手立て	○目標と対応した手立てを具体的に記述 ○実態の分析を踏まえた手立ての設定

③ 個別の指導計画を活用した授業づくり

個別の指導計画をどのように授業に生かしているのかを聞き取った。

○各教科等の個別の年間指導計画に示した単元ごとの目標や学習内容に即して日々の学習を実施 ○指導案に、個別の指導計画の目標、本題材に関わる実態を明記 ○個別の指導計画を踏まえた本時の目標、個別の手立ての設定及び評価の実施

④ 個別の指導計画の評価、改善

個別の指導計画をどのように評価して改善していくのかを聞き取った。

○指導後に、設定した手立ての有効性を検証し、成果と課題を記入し、次の指導に活用

【文献研究と調査研究のまとめ】

文献研究と調査研究の結果から個別の指導計画を作成する際の留意点として、作1～作9のように整理した。

- 作1 担任の主観にならないように、複数の目で実態を捉える。
- 作2 実態を自立活動の6区分の内容に照らして整理することで子供の全体像を捉える。
- 作3 子供の強みや得意なことも捉えていく。
- 作4 検査の結果は、数値だけでなく分析の内容も記述する。
- 作5 実態だけではなく、子供のつまづいている要因も探って「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の観点で仮説を立てる。
- 作6 長期目標は、子供の3年後または卒業時にめざす姿と、現在の全体像から中心となる課題を考慮した上で、1年間の目標として「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の観点で設定する。
- 作7 長期目標を踏まえて、各教科等の年間目標を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の観点で設定する。
- 作8 各教科等の個別の年間指導計画を作成し、各教科等の年間目標を踏まえて、学習指導要領を参考にしながら、各教科等の単元ごとの主な目標や手立てを設定する。
- 作9 学校生活全体を通した指導の方針を設定する。

このような、個別の指導計画を作成する際の留意点に基づき、実践研究において、新たに個別の指導計画を作成する。また、作成した個別の指導計画を授業づくりにどのように活用すれば授業改善につながるのかを、授業実践を通して検証する。

(3) 実践研究

① 対象児童の個別の指導計画の作成

個別の指導計画を作成する際の留意点に基づき、年度当初所属校で作成した個別の指導計画（表1）を見直し、個別の指導計画作成の留意点に沿った作成の経緯（表2）のように、新たに個別の指導計画（表3）を作成した。なお、各教科等の年間目標、各教科等の個別の年間指導計画について、本報告書では国語科の一部を示した。

表1 年度当初所属校で作成した個別の指導計画 【一部省略】

氏名	性別	学年	作成日
年 間 目 標			
・〇年生の国語の教科書を音読することができる。 ・算数は〇年生の学習を理解することができる。 ・生活単元学習で作物を作り、それを調理する活動を行うことで、生活に生かすことができる。			
〇学期の取り組み			
目標	方法（手立て）	評価・今後に向けて	
学 習	・国語の教科書を読むことができる。 ・2位数±2位数の筆算がすらすらできる。	・一文を読んで聞かせることから始めて、細かいステップを踏んで音読させる。 ・「繰り上がりのたし算」「繰り下りのひき算」の筆算の仕方をスムーズにできるようにする。	
生 活	・1日の流れを自分で把握して行動することができる。	・朝のうちに学習の予定を確認し、記入させていく。	
社 会 性	・分からないことがあった時には、友達や先生に聞くことができる。	・分からないことがあった時には、友達や先生に何を聞けばよいのか話す練習をしてから聞きに行くようにする。	

表2 個別の指導計画作成の留意点に沿った作成の経緯

留意点	実施内容	考察
作1	交流学級の担任と共に付箋を用いて、児童の様子について情報を収集し整理した。	交流学級の担任と情報を整理することで、担任が把握していなかった様子などについての情報を得ることにつながった。このことから、児童の様子を多面的・客観的に把握する上で、複数の目で実態を捉えることは有効であると考えられる。
作2 作3	収集した情報を基に、自立活動の6区分の内容に照	これまでの学習面、生活面、社会性という区分での整理では、特定の場面に偏った実態把握となっていたが、

作4	らして整理した。	自立活動の6区分の内容に照らして整理することで学校生活全体を通した実態把握につながったことから、児童の全体像を捉える上で6区分での整理は有効であると考えられる。 また、何を、どんな場面でできるのかを捉えるとともに検査の結果に基づく客観的な視点からの情報を記述することで具体性のある目標や指導の方針の検討につながった。このことから、強みや得意なことや分析結果から認知の仕方の傾向などを示す必要があると考えられる。
作5	児童の姿から困難の背景や児童の願い等を推察し、実態の分析として、学習指導要領（2018）に示された資質・能力の三つの観点で記述した。	困難の背景や児童の願い等を推察したことで中心的な課題や指導の方針の検討につながった。その際、資質・能力の三つの観点で整理したことで、児童の自立と社会参加に向けた現在の課題を、偏りなく捉えることができた。このことから、困難の背景や児童の願いについて資質・能力の三つの観点で仮説を立て、実態の分析として記述する必要があると考えられる。
作6	長期目標は、卒業時にめざす姿の想定と、現在の実態の分析に基づいて中心となる課題を考慮し、1年間の目標として学習指導要領（2018）に示された資質・能力の三つの観点で設定した。	長期目標を設定する際に、卒業時にめざす姿を想定するとともに、現在の実態の分析に基づいて中心的な課題を具体的な姿で捉えることで、児童が抱える困難の改善や願いの実現につながる目標設定となった。 また、各教科等の年間目標を設定する際に、個別の指導計画の長期目標を踏まえることで、児童の実態に合った目標を設定することができた。 さらに、各教科等の個別の年間指導計画を作成し、各教科等の年間目標を踏まえて各単元の主な目標と手立てを設定することで、各教科等の年間目標達成に向けた、具体的な授業づくりの方針を見出すことができた。
作7	長期目標を各教科等において具現化するために、各教科等の年間目標を設定した。	しかし、手立てについては、児童の変容が予想されることから、より実態に応じた手立てにしていくなために、学期ごとに設定することが望ましいのではないかと考える。
作8	各教科等の個別の年間指導計画を作成し、各教科等の年間目標を踏まえて、学習指導要領を参考にしながら各単元の目標（資質・能力の三つの観点の中で主にねらうもの）と主な手立てを設定した。 ※本研究は10月からの実践のため、10月～3月の期間で作成	このことから、児童の中心的な課題を考慮して長期目標を設定し、それを踏まえて各教科等の年間目標と個別の指導計画の一部として各教科等の個別の年間指導計画を作成する必要があると考えられる。
作9	自立活動の6区分で捉えた実態から長期目標の達成につながる指導の方針を設定した。	自立活動の6区分で捉えた実態から指導の方針を設定したことで、特定の領域に偏ることなく、学校生活全体を通した指導の方針の検討につながった。このことから、自立活動の6区分で捉えた実態から指導の方針を設定することが必要であると考えられる。

表3 新たに作成した個別の指導計画 【一部省略】

氏名	性別	学年	年	作成日	平成 年 月 日
児童の願い			保護者の願い		
・交流学級の友達と一緒に遊んだり学習したりしたい。			・現在のように友達と仲よく過ごしてほしい。		
実態（自立活動の6区分）					
健康の保持	○食べ物の好き嫌が多く、野菜はほとんど食べない。				・K-ABCⅡ 習得総合尺度○○ 語彙○○ 読み○○ 書き○○ 算数○○ ・グッドイナフ人物画 IQ○○ <○○○○と診断> 検査所見 ※内容については略
心理的な安定	○自分の生活に結びついていると意欲をもって活動することができる。 ○活動した後、「できた」という肯定的な捉え方がなかなかできないが、担任が肯定的な評価を伝えるとそのことについて自分でも「できた」と答えることができる。 ○期日や内容などの見通しがあると安心して取り組むことができる。				
人間関係の形成	○交流学級の授業では、自分から発表することはほとんどないが、担任が隣に行き具体的に問いかけると話することができる。 ○中間休みには自分から誘って交流学級の友達と遊ぶことができる。				
環境の把握	○経験したことについて、写真などの視覚的な情報があると思いついて説明できる。 ○思考操作のみで考えることは難しいが、具体的に見たり、操作したりすると考えることができる。 ○時間をかけると、発問に対して自分の考えを答えることができる。				
身体の動き	※ 現時点では特記が必要な事項はなし				

コミュニケーション	○時系列にそって話すことは難しいが、日常生活で見聞きしたことは積極的に話すことができる。
実態の分析	
【知識及び技能】 ・学習の中で得た知識を、生活の中で必要に応じて適切に使うことができないため、どうしたらよいか分からないという困り感がある。 【思考力・判断力・表現力等】 ・思考操作のみで考えることが難しいため、抽象的な学習内容を理解しにくい。また、具体的な手掛かりがある学習でも理解して行動するのに時間がかかることから、決められた時間の中で学習課題を達成できないことがあるため、自分に対する自信がもてていない。 【学びに向かう力・人間性等】 ・見通しがあると頑張って取り組むことができるので、できるようになりたいという思いはもっている。	
長期目標	
【知識及び技能】 ・教師の支援を受けながら、学校生活全体を通して、考えたり表現したりするために必要な言葉を知り適切に使うことができる。 【思考力・判断力・表現力等】 ・教師の支援を受けながら、学習の中で取り組むことややり方を理解し、自分の学習課題を達成するために考えたり表現したりすることができる。 【学びに向かう力・人間性等】 ・学習を繰り返す中で、教師の支援を受けながら、できるようになったことや分かったことを生かして学習に取り組もうとする。	
指導の方針	
① 苦手な物にも挑戦できるように、楽しんで取り組むことができる活動を仕組む。 ② 学習に意欲をもつことができるように、これまでに学んだことや興味関心のあることを活用しながら取り組むことができる活動を設定する。 ③ 見通しをもって取り組むことができるように、学習の流れや取り組み方を具体的に示す。 ④ 自分で考えたり、分かったことや気付いたことなどを話したり書いたりできるように、実物や写真などの視覚的な情報を整理して提示する。 ⑤ 自分ができたこと、分かったことを自覚することができるように、振り返る視点を具体的に示す。 ⑥ 自分でより上手に成し遂げることができるように、事前学習や繰り返しの活動を仕組む。 ⑦ 自信をもてるように、交流学級の担任とも協力しながら、活躍できる場面を設定する。 ⑧ 自分の気持ちを表す言葉や使い方を知ることができるように、学校生活の中の場面を捉えて気持ちの表し方を伝えていく。 ⑨ 取り組みの様子を見守り、肯定的な評価を具体的な言葉やサインで伝えていく。	

各教科等の年間目標と評価		
各教科等	目標	評価・今後に向けて
国語	(1) 日常生活に必要な国語の知識や技能を身に付ける。 (2) 順序立てて考える力や感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で、伝え合う力を高め、自分の思いや考えをもつことができるようにする。 (3) 言葉がもつよさを感じるとともに、楽しんで読書をし、思いや考えを伝え合おうとする。	
社会	以下略	

各教科等の個別の年間指導計画（国語科）※個別の指導計画の一部として作成する

月	単元・題材	時数	単元・題材の主な目標	主な手立て	評価
10	消防士の仕事を調べてリーフレットにまとめよう	12	消防士の仕事について伝えたい事柄を集め、リーフレットに書き表すことができる。	書くことに意欲をもつことができるように、児童が興味関心のある消防士の仕事を教材として設定する。	手立てについては、児童の変容が予想されることから、より実態に応じた手立てにしていくなために、学期ごとに設定する。
	ないた赤おに	9	登場人物の行動に着目して読み、感じたことを話すことができる。	赤おにの行動を捉え、感じたことを話すことができるように、必要に応じて挿絵を活用する。	
11	読書	3	伝えたいことを分かりやすくまとめ、おすすめの本を紹介することができる。	おすすめの本を見つけることができるように、児童の興味がありそうな本を選んで並べておく。	
	きつつき	7	説明の順序に気を付けて読むことができる。	順序を表す言葉と挿絵を手活動	
			以下略		

② 授業実践

文献研究・調査研究の結果から、個別の指導計画を授業づくりに活用する際には、次の3点に留意する必要があると考えた。1点目は、個別の指導計画に示した子供の実態を踏まえて単元・題材を設定すること。2点目は、個別の指導計画に示した目標や指導の方針などを学習指導案の中に位置付けること。3点目は、授業における手立ての妥当性を子供の姿から検証し、個別の指導計画に示した指導の方針を踏まえて授業の見直しを図ることである。その過程において大切になるのが、各教科等の個別の年間指導計画であると考え。個別の指導計画に示した長期目標の達成につながる授業づくりを行うにあたり、各教科等の年間目標、各教科等の個

別の年間指導計画に示した単元の目標と主な学習活動に沿って授業を構想するとともに、単元終了時に見直しを行い、各教科等の個別の年間指導計画に示した次の単元の改善を図ることが、個別の指導計画を授業づくりに活用することになると考える。こうした考えに基づいて、新しく作成した個別の指導計画を活用した授業づくりの在り方を、授業実践を通して検証する。

【個別の指導計画を活用した学習指導案】

授業づくりに関して個別の指導計画をどのように活用したかを、授業実践において用いた学習指導案に吹き出しを付けて整理した。

指導案を作成するにあたり、個別の指導計画を活用したことを次のように示す。

凡例 (健) (心) (人) (環) (身) (コ) …個別の指導計画の実態 (自立活動の6区分)

(個①) ～ (個⑨) …個別の指導計画の指導の方針

国語科学習指導案

1 単元名 消防士の仕事を調べてリーフレットにまとめよう

2 単元の目標

(1) 消防士の仕事について分かりやすく説明したり、書いたりすることができる。

(知識及び技能)

(2) 消防士の仕事について伝えたい事柄を集め、リーフレットに書き表すことができる。

(思考力・判断力・表現力等)

(3) 関心のある消防士の仕事について進んで調べたり、分かったことを伝えようとしたりする。

(主体的に学習に取り組む態度)

・個別の年間指導計画に示した単元の目標を具体化した。

3 児童の実態

本児は、興味のあることには意欲的に取り組むことができる。文章を書くことに対しては、苦手意識をもっている。写真やメモなど視覚的な情報があるとそれを見ながら書くことができる。交流学級の友達と一緒に学習したいと思っているが、授業になると自信がなくてほとんど話をしない。

・興味のあることに取り組む (心)、写真などの視覚的な情報があると思いだして説明できる (環) 等の得意なことや強みからの実態を記述した。
 ・児童の困り感を捉えて、文章を書くことに苦手意識をもっているというつまづきや苦手なところも記述した。

4 単元について

児童の興味を生かして、伝えたい事柄を集めて書く力を付けるために「消防士の仕事を調べてリーフレットにまとめよう」という単元を設定した。

・国語科の年間の目標を達成するために、興味のある消防士の仕事を取り上げた。(個②)
 ・写真などを手掛かりにしながら、リーフレットにまとめる言語活動を通して経験したことを分かりやすく書くという単元を設定した。(個④)

5 指導について

先の見通しがあると意欲的に取り組むことができるので、単元の計画を立てる時や、リーフレット作りをする時に、学習内容が分かるように箇条書きにして掲示し、見通しをもつことができるようにしていく。

・見通しをもって取り組むことができるように、学習の流れや取り組み方を具体的に示した。(個③)

6 指導計画

次	時 数	学習活動	目標
一	2	1 単元の計画を立てる。	見通しをもって取り組むことができるように、単元の計画を立てる学習を設定した。(個③)
			□今までの経験を思い出しながら、教師と一緒に単元の計画を立て、見通しをもつことで、消防士の仕事について調べてまとめたことを友達に伝えようと意欲をもつことができる。
	2	2 体験したいこと、見たいこと、質問したいことを考える。	消防署見学の際に、落ち着いて、見たり、質問したりできるように事前学習を設定した。(個⑥)
			□図鑑や教科書で消防士の仕事について調べ、消防署見学で体験したいこと、見たいこと、質問したいことを考えたりすることができる。
	2	3 インタビューの仕方や記録の仕方を練習する。	消防署見学の際に、適切にインタビューしたり、記録をしたりできるように事前学習を設定した。(個⑥)
			□インタビューの仕方や記録の仕方などを練習し、適切な方法を知ることができる。
	1	4 消防署を見学する。	□消防署を見学して、自分が体験したこと、見たり聞いたりしたことを写真やメモに記録することができる。

二	3	5 リーフレットにまとめる。	□写真やメモを手掛かりに、伝えたいことを選び、仕事の内容を説明する文を2、3文程度書き、リーフレットにまとめることができる。
	1	6 発表する。	相手意識をもって伝える力を育てるとともに、自信をもてるように、交流学級で発表する場面を設定した。(個⑦)
			□消防士の仕事について調べてまとめたことを、自信をもって友達に伝えることができる。
三	1	7 学習を振り返りながら、お礼の手紙を書く。	この学習で自分ができたことを考えることができるように、お礼の手紙を書く学習を設定した。(個⑤)
			□学習を振り返り、以前の見学の時と今日の見学を比較し、できるようになったことを手紙に書くことができる。

③ 個別の指導計画を活用した授業改善

各教時の目標とそれを達成するための手立てなどを授業での児童の姿と個別の指導計画に示した指導の方針に基づいて検証し、授業改善を図った。以下にその経過を示す。

なお、授業改善を図るにあたり、手立ての設定、授業の検証、改善において活用した個別の指導計画に示した指導の方針を(個①)～(個⑨)として示す。

1、2 教時

目標	今までの経験を思い出しながら、教師と一緒に単元の計画を立て、見通しをもつことで、消防士の仕事について調べてまとめたことを友達に伝えようと意欲をもつことができる。		
手立て	意欲的に学習に取り組むことができるように、興味、関心のあることや生活上の場面を取り上げる。(個②)		
	児童の姿	授業の検証	改善点
	これまでの国語の学習では、学習課題を提示した時に、やりたいというような発言はなかったが、本時では、「分かったことをみんなに言いたい。」という発言があった。	児童の「分かったことをみんなに言いたい。」といった発言から、調べてまとめたことを友達に伝えたいという思いをもつことができた。これは、以前から興味をもっていた消防士について調べるといことと、「みんなが知らない消防士の仕事を調べて、リーフレットにまとめ、消防士のプロになろう。」という単元のめあてを設定し	見本として提示するならば、もっと身近な、教師が作成したリーフレットの方が興味をもつことができたのではないかと考える。調べたことをリーフレットにまとめる活動に入る前に、教師が作成した「学校の先生の仕事」のリーフレット

	たことからではないかと考える。また、調べてまとめる方法としてリーフレットを提示したことでイメージをもつことができ、学習の見通しをもつことができたのではないかと考える。(個②、個③)	を提示することで、興味をもつことができるようにするとともに、調べたことをどのようにまとめるかが分かるようにする。(個②)
--	--	--

3、4教時

目標	図鑑や教科書で消防士の仕事について調べ、消防署見学で体験したいこと、見たいこと、質問したいことを考えたりすることができる。		
手立て	消防署見学で体験したいこと、見たいこと、質問したいことを考えることができるように、図鑑や教科書の写真や絵などを手掛かりとして示す。(個④)		
児童の姿	授業の検証	改善点	
3教時目、図鑑を見ながら、レスキュー車の中にある道具の使い方等、見たいことを短冊に書いていた。しかし、もっと知りたいことはないか聞いていくうちに、話をしなくなった。	3教時目、話をしなくなったのは、もっと知りたいことはないか聞いていたことで、分からないことを問われているような気持ちになり意欲が下がっていったのではないかと考える。4教時目は、知っていることを話していく中で、説明できないところがあり、それを質問することにした。それが、もっと知りたいという意欲につながり質問したいことなどを考えることができたと思われる。(個④、個②)	3教時目、図鑑を見て、分からないことを取り上げ、それを質問にしようと手立てを考えたと、児童の意欲を下げる結果になった。そこで、4教時目は、知っていることを聞きながらそこから質問事項を探すという手立てに変更した。(個④、個②)	
4教時目は、知っていることを話していく中で、レスキューヘリのことなど質問したいことがたくさんでてきた。	しかし、学習したことに対して分かった、できたという発言は見られなかった。自分ができたこと、分かったことを自覚することができるような振り返りの場面を設定する必要があった。(個⑤)	次時は、インタビューの仕方のポイント、記録の仕方のポイントが分かるように板書しておく。(個⑤)	

5、6教時

目標	インタビューの仕方や記録の仕方などを練習し、適切な方法を知ることができる。		
手立て	様々な場面に対応したインタビューや記録ができるように、ゆっくり、はっきり、聞こえる声でという練習のポイントを示したり、教師が消防士の役になり、様々な場面を想定して練習できる学習を設定したりする。(個③、個④)		
児童の姿	授業の検証	改善点	
インタビューの仕方のポイント（ゆっくり、は	インタビューの練習の時には、練習のポイントを示したことで、自分で確	次時の消防署見学では、質問することや記録すること	

つきり、聞こえる声で)	認することができ、意欲的に練習することができたのではないかと考える。記録の仕方の練習では、様々な場面を想定して練習したことで、どんな時に写真に撮るのか、メモをするのか、記録の仕方を理解することができたと考ええる。(個③、個④)	を、視覚的にとらえることができるように、メモ欄の上に質問内容を書いたカードを1枚ずつ渡す。また、児童が考えた質問を教師が清書して読みやすくしておく。(個④)
を自分で確認しながら練習していた。	記録の仕方の練習では、「道具の使い方は頭で覚えらるから、名前だけメモする。」という発言があった。	
振り返りの場面で、「ゆっくり、はっきり、聞こえる声でインタビューできた。」という発言があった。また、記録の仕方では何が分かったか聞くと、「メモすること、写真を撮ること。」と答えた。	インタビューの仕方のポイント、記録の仕方のポイントが分かるように板書しておいたことで、振り返りにおいて、何を学んだかを児童が意識できたのではないかと考える。(個⑤)	

7教時

目標	消防署を見学して、自分が体験したこと、見たり聞いたりしたことを写真やメモに記録することができる。		
手立て	適切な質問や記録ができるように、質問と記録のカードは担任が持っておき、1枚ずつ児童に渡す。(個④)		
児童の姿	授業の検証	改善点	
いつ、何を質問すればよいのだろうと迷うことなく、すぐ質問していた。レスキュー車の中にあるラムシリンダーの写真を撮り、名前だけメモしていた。	カードは担任が持っていて、質問のタイミングを見て児童に渡すようにしたので、児童はいつ、何を質問すればよいのか迷うことなく、自信をもって質問することができたと考ええる。(個④)	次時の学習で、写真や質問カードを手掛かりに、伝えたいことを選んで説明する文を書くことができるように、メモしたことを、清書して見やすいようにした。(個④)	
初めてのことをたくさん知ることができ、見学を終えて帰る時に、「みんなに教えたい。」と喜んで話していた。	事前に消防署の方と打合せをしたことで、児童が知りたいことを児童が理解できるように情報を整理して教えてもらうことができ、写真やメモに記録することができたと考ええる。(個④)		

8、9、10教時

目標	写真や質問カードを手掛かりに、伝えたいことを選び、説明する文を2、3文程度書き、リーフレットにまとめることができる。		
手立て	何をすればよいのかイメージをもつことができるようにリーフレットの見本を示す。		

(個③、個④) 説明する文を自分で書くことができるように、写真を使う場合と質問カードを使う場合に分けて書き方を提示する。(個③)		
児童の姿	授業の検証	改善点
「リーフレットのよう な書いたものがあつた方 が、みんなに教えやすい し、みんなも写真や文が あつて分かりやすい。」と 発言していた。 8教時目は、何をどの ように書くのかを、教師 に聞きながら書いてい いた。 9教時目からは、自分 でラムシリンダーなど写 真を見ながら、道具の名 前と使い方を書いてい いた。消防士の当番の日の 仕事については、メモし てきたことをそのまま書 き写したり、消防隊と救 急隊の仕事については、 自分で覚えてきたことを 付け加えたりして書いて いた。 仕事を説明する文を書 き終えたら、自分で台紙 に写真と文を割り振って 貼ることができた。	児童の発言から、最初にリーフレ ットの見本を提示したことで、リーフレ ットに書いて伝えるよさを実感するこ とができたのではないかと考える。(個 ④) 8教時目は、書き方の説明が口頭のみ となり、視覚的に確認できる手掛かり がなかったため、児童が自分の力で 書くことにつながらなかったのではな いかと考える。9教時目は、仕事の説 明の書き方を提示し、書き方の見通し をもつことができるようにしたこと で、書き方を参考にしながら、自分の 力で書くことができた。また、写真や メモの手掛かりがあつたことで、自分 が伝えたいことを選び、説明する文を 書くことができたと考える。また、リ ーフレットを作る手順を示したこと で、自分で考えてリーフレットにまと めることができたと思われる。 (個③、個④)	学習の流れや取り組み方 を具体的に示したことで、見 通しをもって取り組むこと ができた。今後も、有効な手 立てとして取り入れていく。 (個③)

11 教時

目標	消防士の仕事について調べてまとめたことを、分かりやすく友達に伝えることができる。		
手立て	発表のポイントに気付くことができるように、教師が発表の見本を示す。 (個③)		
児童の姿		授業の検証	改善点
発表のポイントとして、「つなげないで読む。」「声を大きくする。」「ゆ		教師が発表の見本を示したことで、どのように発表すればよいかが分かり、発表のポイントに気を付けながら	練習する時に、教師がモデルを示すことで児童への気付きを促すことができる。比

つくり読む。」などを挙げ ることができた。 同じクラスの友達に、 「ここだよ。」と、写真を 指さしながらゆっくり、 つまづかないで、相手に 聞こえる声の大きさを発 表していた。 交流学級の友達にも背 筋を伸ばして、みんなに 聞こえる声で発表してい いた。	調べたことを発表することができた と考える。(個③) また、発表の仕方について、よかつ たところを、具体的に褒めたことで、 自信をもつことができたのではないか と考える。その自信から、自分のクラ スの友達だけでなく、交流学級の友達 にも発表することができたと考えられ る。(個⑨)	較するものがあることで、自 分の成長に気付くことがで きる。次時の振り返りに生か していく。(個⑤)
--	--	---

12 教時

目標	学習を振り返り、以前の見学の時と今日の見学を比較し、分かったことやできるようになったことを手紙に書くことができる。		
手立て	写真やメモなどの手掛かりがあれば、自分の力で書くことができることを実感できるように、以前見学した時に書いたノートと今回作ったリーフレットを比較できるように提示する。(個⑤)		
児童の姿	授業の検証	改善点	
以前書いたノートとリーフレットを比較して、書いた量や内容について尋ねると「すごい。」と言話した。「前は、あまり書けなかったけど、今回は、たくさん書くことができた。それは、消防士さんに教えてもらったことをメモしたり、写真に撮ったりしてきたから。」と、話した。	以前見学したときに書いたノートと今回作ったリーフレットを提示し、「学習する前は～だったけど、学習して～できた。それは、～だから。」という型に当てはめて学習を振り返ったことで、できるようになったことを自覚し、手紙に書くことができたと考える。(個⑤)	学習の振り返り方の確認は有効であったので、今後の学習でも取り入れる。初めての取り組みだったので、もっと時間をかけて指導する必要があった。(個⑤)	

④ 授業実践の成果

単元や目標、手立てなどを設定する際に、国語の個別の年間指導計画及び指導の方針と照らし合
 わせながら学習指導案を作成した。また、授業での児童の姿からの授業の検証、次の授業に向けた
 改善点の検討を行う際にも、個別の指導計画を確認し、授業改善を行った。その結果、児童の学習
 に対する意欲の高まりや、必要な情報を集めて説明したり書いたりする力の向上などが見られ、単
 元目標を達成することができた。

III 研究のまとめ

1 成果

文献研究、調査研究、実践研究の結果から、知的障がい特別支援学級における個別の指導計画を活用した授業づくりの在り方として、次のi～vを導くことができた。

- i 各教科等の個別の年間指導計画に示した各単元の主な目標を、学習指導案作成時に【知識・技能】【思考力・判断力・表現力等】【学びに向かう力・人間性等】の三つの観点で具体化する。
- ii 個別の指導計画に示した実態や指導の方針と照らし合わせて、「児童の実態」「単元について」「指導について」「指導計画」を設定する。
- iii 個別の指導計画に示した指導の方針に照らし合わせて、各教時の目標と手立てを設定する。
- iv 子供の学習の様子や、各教時及び単元終了時の子供の目標の達成状況から、目標や手立ての妥当性を、個別の指導計画に示した指導の方針と各教科等の個別の年間指導計画に照らし合わせて検討し、授業改善を図る。
- v 子供の変容とそれに伴う手立てなどの有効性について記録するとともに、個別の指導計画を見直し、必要に応じて修正する。

2 課題

本研究では、児童の実態把握を行う上で、交流学級の担任とともに多面的、客観的に捉えたが、より多くの関係する教員とともに児童についての情報収集や、実態の分析を行い、より幅広い視点で実態を捉えることが必要と考える。さらに、個別の指導計画を作成する際にも、複数名で検討することで、より妥当性のある個別の指導計画を作成することが必要である。

また、個別の指導計画に示した長期目標、各教科等の年間目標、各単元の目標をつなげて設定し、授業を行うことはできたが、各教科等のつながりを検討するところには至らなかった。今後は、長期目標の達成に向けて学校生活全体を通して重点として指導することを押さえた上で、各教科等の関連を意識した単元配置を考えていくことが必要である。

IV おわりに

個別の指導計画の実態把握について、子供の全体像を捉えて適切な指導を行っていくためには、自立活動の6区分での実態把握が必要であることは述べてきたが、実際に作成する際に、実態の捉え方の難しさ、実態を自立活動の6区分で整理する段階での難しさ、そこから子供の中心課題を導き出すことの難しさ、指導目標設定の難しさを感じた。特別支援学校学習指導要領解説自立活動編を活用し、自ら作成することで学んでいくことは勿論だが、研修会などに参加して専門的な知識をもっている方に指導助言を求めることも重要であると考え。その上で、実態把握した内容に抜け落ちはないか、この整理の仕方でのよいかなど、常に見直していくことも必要である。

また、個別の指導計画を活用した授業づくりを行うためには、今年度の子供の学びの状況と有効な手立てなどを個別の指導計画に記載し、引き継いでいくことの大切さを改めて実感した。よりよ

い引き継ぎの仕方についても考えていきたい。このことが、第3次山形県特別支援教育推進プランにおいて示されている切れ目ない支援を行うことにもつながると考える。

さらに、切れ目のない支援を進めるにあたり、第3次山形県特別支援教育推進プランには、『やまがたサポートファイル』（山形県 2015）の活用等が効果的であると示されている。『やまがたサポートファイル』を基に、子供についての情報を保護者と学校で共有することで、子供の実態に応じた支援につなげていきたい。

本研究の成果を発信するにあたっては、本研究で示した個別の指導計画を作成し活用することで、実態に応じた授業づくりが行いやすくなるなどの利点を示すとともに、具体的な作成の仕方と作成するためのスケジュールを提示するなどして、特別支援学級担任が個別の指導計画の作成及び活用の具体的なイメージを持つことができるように伝え方を工夫していきたい。

特別な支援を必要としている子供が増えている中で、特別支援学級担任は、どのように指導したらよいのか悩んでいる。この研究の成果を生かして、特別支援学級担任のサポートをしていきたい。さらに、特別支援学級担任がより相談しやすい環境（場、人）づくりにも努めていきたい。

謝辞

最後になりましたが、貴重な研修の機会を与えてくださいました山形県教育委員会、並びに川西町立小松小学校の小林英喜校長、また、御指導くださいました山形県教育センター柏倉昭夫所長をはじめとする諸先生方、特別支援教育課の先生方、特に温かく丁寧に御指導くださいました担当の青柳リエ子指導主事に厚く御礼申し上げます。さらに、調査研究に御協力いただいた米沢市立興譲小学校、南陽市立赤湯小学校、天童市立蔵増小学校、山形県立村山特別支援学校、山形大学附属特別支援学校、筑波大学附属大塚特別支援学校の先生方、実践研究に御協力いただいた所属校の先生方に、心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 文部科学省 2018『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編』株式会社東洋館出版社, p114
- 2) 海津亜希子 2017『個別の指導計画 作成と評価ハンドブック』株式会社学研教育みらい, p27, 54, 60, 91
- 3) 宮崎英憲・是枝喜代治 2012『〈特別支援教育〉個別の指導計画を生かした学習指導案づくり』明治図書出版株式会社, p15, p18
- 4) 山形県教育委員会 2015『山形県第6次教育振興計画』
<https://www.pref.yamagata.jp/ou/kyoiku/700001/rokkyoushin/6kyoushin-sakuteiban/6kyoushin-keikaku>

参考文献

- 1) 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 2014『特別支援学校及び特別支援学級における教育課程の編成と実施に関する研究資料』
<https://www.nise.go.jp/cms/resources/content/9716/seikal2.pdf>
- 2) 山形県教育委員会 2018『第3次山形県特別支援教育推進プラン資料』

<https://www.pref.yamagata.jp/ou/kyoiku/700027/plan3.pdf>

- 3) 中央教育審議会 2010『児童生徒の学習評価の在り方について（報告）』
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/1292163.htm
- 4) 城 一樹 2018『個別の教育支援計画、個別の指導計画の作成と活用』MAY 2018 特別支援教育研究, p39
- 5) 文部科学省 2018『小学校学習指導要領（平成29年告示）』株式会社東洋館出版社
- 6) 文部科学省 2018『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編』株式会社東洋館出版社
- 7) 文部科学省 2018『特別支援学校幼稚部教育要領 特別支援学校小学部・中学部学習指導要領』海文堂出版株式会社
- 8) 文部科学省 2018『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編（幼稚部・小学部・中学部）』開隆堂出版株式会社
- 9) 文部科学省 2018『特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編（小学部・中学部）』開隆堂出版株式会社
- 10) 文部科学省 2018『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）』開隆堂出版株式会社
- 11) 筑波大学附属大塚特別支援学校 2018『研究紀要第62集「みんなでつなぐ個別教育計画」』
- 12) 古川勝也・一木薫 2016『自立活動の理念と実践』株式会社ジアース教育新社
- 13) 滝吉美知香・名古屋恒彦 2015『特別支援教育に生きる心理アセスメントの基礎知識』株式会社東洋館出版社
- 14) 太田俊己・高倉誠一・中坪晃一・日本生活中心教育研究会 2012『特別支援の「子ども理解」よさが生きる教育サポート』
- 15) 山形県 2015『やまがたサポートファイル』山形県健康福祉部 障がい福祉課

発行 平成31年3月
山形県教育センター
天童市大字山元字犬倉津 2515
TEL 023(654)2155

